
ローザ

伊佐山詩織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ローザ

【Nコード】

N2173D

【作者名】

伊佐山詩織

【あらすじ】

政治活動家でもあったローザが死んだ。その葬儀で再会した洋子は見違えるほどの大人の女になっていた。過激派の母と個性的な娘との確執に振り回された「僕」の視点から描く、時代に抗った一人の女の人生。

第一章 死と再会

「おい、現役がきとるらしいで」

「うつそやるー」

席に付くなり後ろで交わされた会話に少し気持ちを張り詰めながら、正面の、白い花の飾られた遺影に向かい、僕は心の中で手を合わせた。

『偲ぶ会』などと言っても、ローザの新左翼時代はもう三十年近くも前のこと、そのあとの紆余曲折で知り合った人たちは連絡が付かなくて呼んでないとのことだったから、ここに集まった連中はほとんどが何十年ぶりの再会なのだろう。であってみれば当然なことに、遺影への挨拶もそこそこ、皆、互いの無事を喜び合うので忙しく、僕の前の席に座った男など、東京からの新幹線でワインを八本空けたなどと豪語しつつ、畳に膝をついてよろけながら、会などまだ始まってさえないのに何を勘違いしたのか、そこいらに遅刻の詫びをして回っている。

僕の席に挨拶に来た洋子は、正座して白のワンピースの裾を合わせ、申し訳なさそうに、

「こんなとこに招待してよかったんやるか？」

「完全に場違いやと思うけど、ええよ。お葬式には行けへんかったから」

「やったらええねんけど……」

「さっき、現役が来てるって……」

「誰が？」と洋子は顔を曇らせた。

「何か、後ろの方で聞こえたんやけど」

「来とるよ。三人も」と声をひそめ、「だって、断られへんやろ。もう、シャベリがあるんやな」

「現役のことは、秘密？」

「でもないけど、あまり言わんとな。じゃ、悪いけど」

洋子は立ち上がり、また他の席への挨拶に去った。十七年ぶりの再会も、相手が洋子だと実にアツサリとしたものだった。

*

受付でもらったコピーの年表を開くと、「一八歳……この年、洋子誕生」とあり、僕は指折り計算して、ふう、とため息をついてしまふ。洋子に連れられて「本当のお母さん」の前に引き出された年ローザは三十八、つまり今の僕らと同じ歳だったわけだ。

「あなた、お若いあなた」とさっきの新幹線ワイン男が話しかけてくる。ハゲ上がった頭まですっかり真っ赤になり、もう少し口が尖ってさえいればマンガのタコそのもので、僕はこの男に『還暦ダコ』の名を進呈した。「あなたはローザとはどんなご関係、いやご関係なんて、嫌らしい言い方だな、でも、どんな言い方をしたらいいのかな？ いや、思い切って、もう聞いちゃおう、どんなご関係？」

「娘さんの友人です」

「洋子ちゃんの？」

「はい」

僕の答えを聞いて還暦ダコは怪訝そうに考え込む。

「洋子ちゃんの友人がここに来るの？ そりゃ珍しいんじゃないの？ たぶん、そんなのあんた一人じゃないのかな」

「そうだと思います」と僕はわざと不機嫌な調子で言った。

「いや、ごめんなさい」と還暦ダコは僕のそばににじり寄り、真っ赤になった手で僕の膝を軽く打ちながら「新幹線の中で、ワイン一杯だけって思ってたら、次々空けちゃってね、もう酔っちゃってね、八本も空けちゃったの、八本。誰も止めてくれる人がいないもんだから、それに久しぶりの神戸なんで、ウレシクってね。いえね、意外だったんですよ、ローザの追悼集会にあなたみたいな若い人がいらつやるなんて、だから、失礼かとは思ってたんだけど、ついね、聞いちゃったってわけだ。そうか、洋子ちゃんの友人ですか。そうですか……」

「おい、後藤！」と誰かが還暦ダコに後ろから呼びかけ、膝で歩い

て来て、「絡むなよ、若い人が驚くやろ」

そう言って、今度は僕に、

「お若いですね。ローザとはどんな？」

「それはもう俺が聞いたよ」と還暦ダコ。「洋子ちゃんの友人なんだって」

「ああ、洋子ちゃんのね」と納得したような納得しないような顔。「いつローザに？」

「昔、洋子さんにお店に連れて行って貰ったんです。その時に」

「そうか、ローザ公認のボーイフレンドやったっちゅうわけやな」

僕がアイマイに笑むと、男も同じような笑みを返してきた。口が左右に細長く引つ張られ、ヒゲがナマズそっくりにつり上がった。

こいつは『還暦ナマズ』だ。

*

「さて皆さん」と司会進行らしい男がマイクの前に立った。「本日はローザのためにご参集いただき、ワタクシが言うのもなんですが、ありがとうございます。本日の集まりは、もう三十年以上前になりますか、ローザの政治活動時代に知り合い、強烈な印象を受け、影響を受けたものたちのなかでも、特に、後々までつき合いのあった篠原、佐伯、村山の三人が発起人になって開催したものです。それで、お願いがあります。今日は、この会場では、ぜひ、皆さん、心を一つにして頂きたい。旧交を温め合うのは、この集会の後にして、ちゃんと、部屋も取っておりますので、そこでしていただきたい。ここでは、ぜひ、発言者の発言に耳を傾け、決して、私語で声が聞こえない、などということのないように、お願いしたのであります」

「そりやおかしいよ」と宴会場の後ろの方からヤジが飛んだ。五十人近い参加者は皆そちらを見た。

これも還暦近いだろう男が立ち上がった。熊のような体格に肩までの銀髪を真ん中で分け、ブ厚い唇に鋭そうな目をして、見るからにウルサそうな風貌、まさに『還暦グマ』だ。

「何がですか？」と司会は憮然とした口調で還暦グマに返した。

「ローザはそんな堅苦しいことを望んだかな、ってことだ。きつとローザは、ここでみんなが旧交を温め、思い思いに楽しい時間を過ごして帰っていくことを望んでると思うんだ」

ソノトリ、と、合いの手が入った。こういう合いの手も久しぶりで、それが『その通り』だと理解するまで少し時間がかかった。

「やめようよ、こんなところでもめるのは」と今度は別の、これも還暦近いだろう女性が立ち上がって、還暦グマに食いかかった。「まずは黙祷でしょう」

「黙祷？ 黙祷なんかするの？」と還暦グマ。

「悪いの？」と女性。

「日の丸と君が代は悪くても、黙祷はいいのか？」

「対象が違うでしょう」

「でもやることは同じだろう」

「まあまあ」と司会がマイクを通して。「今日はお互いの些細な主義主張は出来るだけ押さえていただいて……そうですか、黙祷も問題ありとなると……」

「問題ねえよ」と還暦ダコがヤジを飛ばした。「やりてえやつだけ、やったらいいんだからよ」

「ソウヨ」と、どこからか女の声が相づちを打った。

「それでは、有志のみということで、黙祷！」と司会はいきなり言った。

僕は正座して目を閉じた。

*

「今日、私の本当のお母さんに、会ってみん？」

あの春の日、ちょっと拗ねたような、何かを隠していることを仄めかすようないつもの言い方で洋子は言った。

「本当のお母さん？」と僕は、当然、聞き返した。

高三になったばかりの春、サークルも引退し、そろそろ本気で進学先を決めようとしていたころだった。僕と洋子は淡い抱擁を知り、

それでもキスはまだという微妙な関係だった。

「本当のお母さん？」と、僕はまた聞いた。洋子が返事しなかったから。

「みんなには、絶対、秘密よ」

そう洋子は言ったけれど、本当のお母さんがいることが秘密なのか、その本当のお母さんにこれから会うことが秘密なのか、僕にはわからなかった。それに、本当のお母さんがどこにしているとすれば、今の洋子のお母さんは二セモノなわけで、二セモノにさえ会っていないのに本物に会うつていうのは、これは順当なのか、逆なのか、とまあ、そういう愚にもつかぬ考えが巡り巡って、僕の十七歳の頭は混乱した。

「なんで？」と僕は聞いた。

「秘密やから、やんか」と洋子は言った。

「秘密つてことやなくて、なんで僕に本当のお母さんを紹介するんや」

「紹介したいから、やん」

「ぜんぜん、わけがわからん」

「実は、昔から約束しとったんや。ボーイフレンドが出来たら、だれより先に紹介するつて。やから、ええやろ」

「うん」と言いながら僕は逡巡した。もともとラブレターのやりとりとかで始まった関係じゃなかったし、好きの嫌いの言いあつたこともない。ただ、いつの間にか一緒にいる時間が長くなり、ちょっと触れた指の先にふれあいというものを知り、つい一週間前に抱擁を知っただけだった。恋人同士なんて意識はもちろなかった。世間で言う、ボーイフレンドだとかガールフレンドだとか、その手のなんとなく生臭い言い方も僕らにはそぐわないような感じだと勝手に思っていた。

それが、いきなり今日、洋子の「ボーイフレンド」として、それも「本当のお母さん」に紹介されるのだという。気持ちの準備が出来てない、なんてものじゃない。一体何が起ころうとしているのか

さっぱりわからず、僕はただ「うん」と答えて逡巡するほかなかったのだった。

そして逡巡を抱えたまま連れて行かれたのがローザの店だった。

僕とローザとの、運命的と言っていい出会いだった。

*

「ローザとの出会いには様々な形があり得たでしょうが……」と献杯の音頭をとる役の、これは完全に還暦を過ぎたと思われる初老の紳士がマイクに向かった。「その出会いをずっと大事にして、今日も、そのまま現役でいらっしゃる方が何人か見えられているのとこのことで、もう現役ともなれば、これは国際情勢から始まって、国内情勢、それから主体の状況を経て政治方針にまで至る、緻密な分析が必要になってくるのでありましようが、そのようなことをいたしておりますと、せっかくのこのビールの泡が、さながらウタカタのごとく、消え去ってしまうでありますから、ここは簡単に三点だけお話ししましょう。ワタクシがローザと知り合ったのは、というより、ローザが、私らのやっております反戦系の社会科学研究会略して反戦社研ですが、そこに顔を出したのは、忘れもしない、一九五九年の八月二十四日でありました。午後三時二十四分頃だったと記憶しております。本当に、このご遺影からは想像も出来ないような、本当に華奢なお嬢さんで、そんなお方が、我々のようなむさ苦しい男ばかりの社研の部屋にいきなり入ってこられて、ワタクシは、これは何か道に迷ったか何かで、道でも聞きに来たんだらうと、そう思ったものであります。ところが、いや間違いじゃない、このビラを見て来たんだ、と、当時ワタクシらが撒いたビラを手におられまして、それで話を致しておりますと、実に素晴らしい感性を持っておられる。国際情勢についてもよくご存じで、我々に、さあ、あなた方学生はこれからどうするんだ、などと議論を吹きかけてこられまして、こちらとしても、これは面白いことが始まったぞ、てなもので、談論風発、それこそ、ローザが、当時沈滞気味だったワタクシたちの反戦社研に、新しい風を吹き込んでくれたのであり

ました。それで、こんなお嬢さんに、こんな汚いボロ部屋にいつまでもいて貰うわけにはいかないというので、それから喫茶店にローザを誘ったのでありますが、ローザは、最初、断りました。喫茶店になんか、行ったことがない、恥ずかしい、などと、ちよつと拗ねたようにおつしやるわけで、さつきまで、むくつけき男たちを相手に一步も引かなかったアマゾネスが、今や、昔風の言い方で、ここにご参集なさつていらつしやるような意識ある女性方には失礼を申しますが、それこそおしとやかな大和撫子に化けてしまったわけ……」

「あのー」と会場の中から、とても「おしとやかな大和撫子」とは思えぬような、女性の甲高い声がした。「ビールの泡、消えそうなんですけど」

「は？」と初老の紳士には、女性の発言の意味が飲み込めていないようだった。「その大和撫子の部分を見せて、これでローザは、我々の心をしっかりとつかんでしまったのであります。のちのち、ルーテ・ローザとして名を馳せる……」

「あのー」とまた同じ女性の声がした。「ビールの泡、完全に消えてしまふんですけど」

「あ、ああ、そうですね」とやつと紳士も気付き、

「では、献杯！」

けんぱーい！ と会場も遺影に杯を捧げた。

「で、ありまして」と、献杯のコップの縁に口を付けただけで、紳士はまだ話を続けるつもりでいるらしかった。会場に軽い失笑が漏れた。

司会が紳士に歩み寄り、その耳元に口を寄せた。

「いや、たった三点だけやて、そんな長い話やあれへんて……」と紳士の喋りはマイクを通して会場にモロに漏れ、さらに失笑をかった。

司会はまた紳士の耳元に口を寄せた。

「いや、やから、今話しとるのは、一点目の話の導入や、これから

六〇年安保闘争のデモの時の、例の話に入っていくんや。そないに長い話やあれへんて……」

仕方ない、話させてやろう、という雰囲気会場にも漂いだした。「それでは皆さん」と司会はマイクを通さずに「斉藤先生のお話を伺いながら、料理の方、始めて下さい。お酒は飲み放題ですので、ビールからお湯割り、水割りまで、ご自由にご注文下さい」

「あの人は昔から話が長いんだよ。なんで斉藤さんに献杯の音頭なんかやらすかな」と還暦ダコは僕にビール瓶を突き出しつつ、「大学の先生なんてやってりゃ、挨拶も長くなるってもんだろぅが、限度があるつものさ、そう思うでしょう」

軽くうなづきながらコップでビールを受け、回りを見れば、誰一人、と言っていていくらい、紳士の話の聞いている人はいない。

コップに口を付けて、今度は還暦ダコに注ぎ返そうとすると、

「いや、私はもうこれですから」

見れば、水割りのグラスを手に持っている。

「いえね、もうワインを八本も飲んじやったら、ビールなんて水みたいなものでしょう。さつき仲居さんに言つてね、水割りのグラスに水で割らずに持つてこいなんちつて」

「おいおい」と隣で別の人と話を始めていた還暦ナマズが還暦ダコをたしなめる。「また若い人に絡んでないか」

「いいえ、そんなことないです」と僕は還暦ナマズに答えながら、仲居さんが鍋の用意を始めるのを眺めていた。いや、仲居さんの向こうに見えるローザの遺影を眺めていた。黒い四角い枠にはめられたただの太ったオバサンの笑みが、ローザの不在の確固たる証拠としてそこにあった。ローザは死んだ。ローザはもういない。なのに、なぜ、どうして、誰も、ここで涙を見せないのか。

*

会場は次第に乱れ、それでも紳士の挨拶はまだ、六〇年安保闘争の戦後史の意味が云々の周辺を延々と巡っていた。心を一つに、な

どと言っていた司会さえ、もう会場に降りてきて還暦グマとさしつ

さされつ哄笑を交わし合い、紳士の方を見てもいない。会場に旧交を温める者の一人としていない僕はただ仕方なく紳士の話聞くふりをしながらローザの想い出に涙をこらえた。『偲ぶ会』なのになぜ涙をこらえなくてはならないのか、などと理不尽の想いに堪えなから。

*

ローザに初めて会ったあの春、僕は高三になったばかりで、もちろん将来のことなど何も考えていなかったし、進学先さえ決めていなかった。文系を選んだのもただ数学が苦手だったから。実際、当時の僕の通っていた公立の普通高校ではそういう消極的な進路選択をする生徒が過半だったと思う。だから、「これから遺伝子工学の時代や」などと言いつつ、高2の春には早々と生物工学を志望していた洋子は異様だった。と言うより、洋子という存在自体が異様だった。

異様と言えば、小学生の洋子はさらに異様だった。小学校三、四年のころも洋子と同じクラスで机を並べていたのだったけれど、僕もまた他のクラスメートと同じく、この奇怪な少女の奇矯な言動に辟易して、ただもう、ひたすら無視していた。洋子はイジメの対象ですらなかった。敬遠でもない。ほとんど純粹に忌まれていた。

たとえば国語の時間、先生が洋子に朗読を当てる。それだけで皆に緊張が走った。洋子の読み方はとても普通なんてものじゃなく、言ってみれば奇妙に上手すぎたのだった。洋子は文節ごとに抑揚を付け、形容語には感情を入れ、会話の「」の中では声色を使い分けて、まるで一人芝居のように読むのだった。しかもどんな難しい漢字も読みこなし、すらすらと、とぎれることなく読む。それが小学生の耳には極端にサワるのだった。

ヒョウキンをもつてなるある男子など、洋子が読み始めると、「うあー」などと耳を塞いで机に伏して、教員に叱られたりする。

実際、洋子の朗読は、生で聞くには、実に聞くに堪えがたいものがあつたと思う。

あるいは、体育の行進の時。

手の振り上げ方、脚の蹴り出し方、顔の向き、視線、すべて、どれもが型にはまったように直線的で、市民のパレードに一人だけ軍人が紛れ込んでいるかのように、奇怪だった。

そして先生は、朗読も、行進も、洋子を手本にしろ、と言うのだった。生徒たちも、もちろん、先生の言う通りにやったら洋子になることはじゅうぶんわかっていて、だから洋子が手本だということもじゅうぶんわかっていて、それでも実際にはテレやハニカミだとかがあつて洋子のようにはやれないわけで、それを臆面もなくやつてしまえる小学生の洋子はやはり異様だった。

高校で再会したときには、すでに洋子はその異様さを一種の個性にまで磨き上げ、一種の洗練にまで至っていた。でなければ親しくなどならなかつたらう。

*

つき合いの始まった高三の春、『ローザ』まで洋子に引つ張られて行くと、まったく、『ローザ』などというハイカラな名前とはおよそそぐわぬ、戸板にゴロゴロと野菜が投げ出されただけのようなきたならしい八百屋だった。カンバンからして、『産直の店 ローザ』と、ベニヤ板にマジックで書いてそこに立ててあるだけ、しかもその文字がまた、これまで見たことのないほどのド下手だった。洋子の横で、なんと言つていいかわからず突つ立っている僕の様子を面白がるように、

「店も、野菜も、カンバンも、信じられん、汚いやろ」と、店頭の水道の蛇口に座りこんで里芋を洗っていたネエちゃんは言った。

僕は何とも言いようがなく、店の前に立ちすくんだ。

ネエちゃんは立ち上がるなり、

「ボーイフレンドか？」と、洋子に向かって言った。

「うん」と洋子は返した。

「エエ子そうやな。あんた、幾つ？」

「ローザ、同級生や」と、洋子はローザに向かって言った。

「やったら、十八か？」

「まだ十七です」と僕はこの奇妙なネエちゃんに言った。

「十七か……私が洋子を身ごもった歳や」

そう言つて、ローザは僕の肩を親しげに叩きながら笑つた。

「あ、ごめん」とローザが言うのを見ると、叩かれた制服に土が付いていた。その土を、ローザはまた土のついた手で払おうとして、制服にさらに土を付けた。

「ローザ、ワザとやる」と洋子は責めるように言った。

「そんな、ワザとやあれへんて。しょうがない、ちよつと、上がつて、上で脱いでもろうて。これは濡れ雑巾で落とさんとあかん」

「あかんて、上に上がったら、ズボンまで何もかも土だらけになるやる」

そついつて洋子は自分のハンカチを蛇口で湿し、僕の制服の肩に当て、パタパタと土を拭つた。その間、ローザは僕をじつと見据えて笑んでいた。髪はショートでボサボサ、しかも薄く土にまみれており、体つきが小柄なのも相まって、まるで飢えた少女に食べ物をねだられているような、奇妙な感じだった。

「ええよ」と洋子が言った。肩の土のほとんどは落ちていた。

「あんたが来るつてわかつとつたら、上も片付けとつたんに。上でお好みでも焼いて、一緒に食べて行きや……」

「言つて来たらそつなるやるから、いきなり来たんよ。今日はもう、すぐ帰るからな」

「あんたもネエちゃんに似て、イケズになつてきたな。あ、そうや、名前と連絡先、聞いとこか。何かあつたときに、な」

ローザは台の上にあつた紙と鉛筆を僕に差し出した。

「ローザ、それ強引すぎるで」と洋子は言った。

*

「……まずは有無を言わさぬ強引さであります」と、例の紳士の話は十分近く続いていた。「たとえば集会参加者の中で、これは見所がありそうだ、となると、ローザはもう、ピターツとそばについて

離れません。それで名前と連絡先を聞き出すわけです。で、私たち一緒にその目当ての男の所へと押し掛けていって、情勢論から、人生論から、やりだすわけです。それでもう、ローザの舌鋒の鋭さは、相手に逃げ出すスキを与えないわけで、

『アナタはこの国の政治をどう思っているか？』

と、バーンと、いきなりこう来る。

『よくないと思う』

なんて返そうものなら、

『このままでいいと思うか？』

『思わない』

『それならどうしたらいいと思うか？』

『なんとかしたいと思う』

『一人で何が出来ると思うか？』

『わからない』

『そうやって何もせずにいることは現状維持という罪を犯しているとは思わないか？』

『わからない』

『わからないでいることも一つの罪だという意識はないのか？』

これで相手は黙り込むわけです。で、そこで、ローザは優しく微笑むわけです。それはもう優しく、優しく、包み込むように。それで、

『ひとりで考えていても仕方ないし、一緒にやろうよ、ね』

これでもう、たいていの男はイチコロで落ちるわけです……」

「オルグなんて言っただって、若い人にはわからんでしょう？」と還暦ナマズが、紳士を無視しながらビールを注いでくる。それをちよつと飲み、

「わかりますよ。僕らの頃にも少しだけだけど、運動は残ってたから」

「でも、あんたらの頃の運動はもう……」と還暦ダコが横から口を挟んだ。「むちゃくちゃだったでしょう。そりゃ、僕らの責任でも

あるんだけどね」

「そうやで、ワシらの責任でもあるで」と還暦ナマズ。「ワシらの中にあった対立とか、感情的なしこりとか、そういうんが、そのまま若い人らに引き継がれてもつて、増幅していつて、あんなにわやくちやになつていつたんやと思うで」

「今日は現役の方も……」と僕は少し周りを憚つて言った。

「何が現役や、かめへんて」

「あんた若いのに、よく気が付くね。さすが洋子ちゃんの友達つてなもんだな、で、あんたとローザは何回ぐらい会つたの？」

「十回位、ですか」と僕はウソを言った。

*

初めて会つた日、おみやげ、とローザから手渡されたのは網袋に入つたタマネギだつた。洋子と付き合つてることさえ親には黙っているのに、こんなものを持って帰つてなんと云えばいいのか。そのとまどいを見透かしたように、ローザは、

「友達のお母ちゃんくれたつて言つたらええよ。ガールフレンドの親からもらったなんて言うたら、卒倒する親もおるかも知れへんもんね。あ、それ、無農薬の自然栽培やで」

「農薬を使つてないんですか？」

思えば、その時の僕の、こういう素朴な驚きがローザは嬉しかったのだらう。ローザの喋りを誘発してしまつたらしく、立ちっぱなしで、ローザの雄弁を聞くハメになつた。

「農薬が毒だつてことは知つてはるよね？」

「ハア」

「食べ物と毒が相容れる思う？」

「思いません」

「やから、食べ物を作るのに毒は使わへん。簡単やろ？」

「でも、それで農薬が成り立つんですか？」

ローザは実に嬉しそうに笑んだ。

「いい？ 農薬なんていつてるけど、農薬を使つてやる農薬はもう

農業じゃないんよ。あれは工業の一部なんよ。水田なんて言うてるでしょう？ とんでもない。あれは、私に言わせれば油田よ、わかる？」

「わかりません」

「ガソリンで耕して、ガソリンで草取って、ガソリンで刈り入れて、ガソリンで干して……石油がなかったら成りたたへんでしょう。だから石油をジャブジャブつぎ込んでるって意味で、あれはもう油田と言うほかないんよ。油田で作られてるものなんか、農産物やない、あれはもう工業製品やて。農業やない、工業や」

「ローザ！」と洋子は遮った。

「ええやんか。せっかく話をしとるのに」と洋子に。そして、

「ね、ええやろ」と僕に。

「はい」と僕は仕方なく。

「やからね、油田になってもうて、畑や田んぼの土そのものが駄目になつとるんよ。そんな駄目な土で作つとる野菜が害虫なんかに抵抗力があるわけないわ。やから大量に農薬があるんや。昔の野菜に比べたら、野菜のビタミンも減つとるでえ。昔の野菜と今の野菜と似て非なるもんやと思つた方がええ」

「そうなんですか？」

「たとえば……」とローザは台の上の本を開いた。乾いた土が埃となつて舞い、それを手で払いのけながら僕の前にその本を差し出し、差し出しながらローザ自身もスリ寄ってきた。本を覗き込む僕の肩にローザの肩が触れた。

「ほら、ホウレンソウの項目を見るやろ、十年前とビタミンCがどの位減つとるかを比べて見てみ……」

僕の顔のすぐ近くにローザの顔があり、洋子と抱き合うときよりもドキドキした。

「ローザ！」と洋子は苛ついた口調で言った。「もうええやんか。別にそんな話し聞きに來たんやないから。もう帰るで」

「やったら、孝弘君、またお出でな。洋子のボーイフレンドやから、

安くしとくで。インスタントな食べもんばかり食べとつたら、アカンで」

ローザは僕の肩を叩こうとして、「おっと、こりゃアカンな」と言ってやめた。

その帰りにお好み焼き屋に寄ると、とうぜん話題はローザのことだった。

「ローザって言うの？ お母さん」

「若い頃からのあだ名やねん。私も昔からローザって呼んでたからお母さんなんて感じはせえへんのよ。私にとって、お母さん言うたら、今のお母さんでしかないわ。なんか、ローザは昔からローザって感じ」

洋子はお好み焼きをひっくり返し、上からコテでグイッと押さえつけた。最近知った洋子の癖だった。

「離婚とか、そういうの？」

「ちやうちやう」と洋子は言った。「そこんとこ、ものすごい、ややこい説明になるんやけど、聞く気ある？」

「あるけど」

「でも、今日は、私の方が話す気になれへん。ま、いつか、な」

*

やっと献杯の紳士の挨拶が終わって司会にマイクが帰り、『偲ぶ会』の本来のプログラムが動き出す気配があった。けれど、もう会場は「心をひとつに」どころではなく、あちらで喚き、こちらで叫び、哄笑と、爆笑と、ドラ声と、ダミ声と、甲高い笑い声とで乱れに乱れていた。

司会はマイクを通し、

「斉藤先生の、実に、先生の記憶力の物凄さを我々に再認させていただいたようご挨拶でありました。それでは時間もおしておりまですので、当初のプログラムに入らせていただきます……」

だれも聞くものなどいない。

けれど、洋子が席から立ち上がって壇上に近づくと、それに気づ

いた会場の前の方から順に拍手が起き、その拍手の波は次第に広がってやがて会場を呑み込んだ。拍手を浴びながら洋子はある種の風格をまとうて歩いていて、その迫力に僕は呆氣にとられながら、皆と一緒に手を打った。

マイクの前に立つ洋子がグルリと会場に視線をやると拍手は止み、天井からは水を打ったような静けさの幕が降りてきた。十幾つの鍋のクツクツいう音と仲居さんの足音だけが聞こえた。

「今日は、母のためにありがとうございます」

そう言つて洋子は頭を下げた。会場の皆も頭を下げた。

「母は、いえ、私にとつても、母は『母』と言うより、皆さんと同じ『ローザ』でしたから、これからも私は『ローザ』と呼ばせていただきます」

異議なし、と男の掛け声が飛んだ。

「私は、ローザを憎んでおりました」

洋子は「異議なし」男を睨みつけるように言つた。会場が張りつめた。

「今日のプログラムは、実は私の挨拶のみしか決まっております。どなたかが言われましたように、ローザ自身も、きつと、皆さんがここで旧交を温めあわれ、楽しい時間を過ごして帰って行かれることを望んでいると思います。ローザの想いを汲めば、むしろプログラムなどない方がいいと思います。でも、私には、それでは納得が出来ないのです。私の、ローザに対する想いをここで皆さんに知っていただきたい。知つて欲しいのです。……私はずっとローザを憎んでおりました。いえ、今でも、多分心の奥底では憎んでおります。皆さんご存じの通り、私は自分の本当の父親が誰であるのか知りません。きつと、ここにいらっしゃる方の中の誰かではないかと思われませんが、もうそんなのはどうでもいいことです。私の父は、私を育ててくれた山内祐蔵以外にはおりませんから。でも、私は、私をこつという複雑な境遇においてしまったことに対して、一言でいい、たった一言でいい、詫びの言葉を、ローザから聞き出したかった。

ごめんね、の一言でも聞ければ、それでよかったのです。けれど、残念なことに、聞けませんでした。私と共に十年にわたる闘病生活を送りながら、多分、ローザは思うところのすべてを私にさらけ出し、ぶつけてきたことだと思いますが、それでも、私に対する詫びの言葉であるとか、あるいは、感謝の言葉など、何一つ、一言もありませんでした。ただ、ただ、思うところを要求し、要求が通らなければゴネ、周りにどんな迷惑をかけても自らの要求を非妥協的に貫徹し、徹底していくところは、死ぬまで変わらなかったと思います。…… 本当に、以前は、私の人生、いえ、私が生まれたこと自体が間違いではなかったのかと、いつも考えておりました。私の人生など、ローザの奔放な生き方の不幸の集約ではなかったのか、と。本当に、亡くなってからも、ローザの生き方や考え方を納得できたとはとても言えません。小さい頃から、亡くなるまで、本当に、ローザは私の疫病神でした……」

誰かが咳をした。軽い咳だったのに洋子の話はとぎれ、会場全体は咳男を冷たい視線で突き刺した。

「小さい頃の私は、ローザがなぜそこにいるのか、全く理解できませんでした。いえ、理解したくありませんでした。ローザさえいなければ、私は普通の家庭の、普通の女の子を装うことが出来たからです。私の本当の母は、ローザの姉に当たる美枝ひとりだと今でも思っております。父親も、もちろん、祐蔵だと思っています。本来ならいここに当たるきょうだいたちも、私にとっては本当のきょうだいです。ローザさえくつついてさえいなければ、私の家庭は、普通の、何の変哲もない、ごくノーマルな家庭だったのです……」

ただ静かだった会場の空気は、洋子の話に極端に張りつめてきた。「皆さんもご存じの通り、私は八つの頃までローザと一緒にコミュニケーションにいました。なぜあのようなコミュニケーションが出来たのか、皆さんの方がご存じですから、繰り返しません。ただ、私にとっては、あのコミュニケーションで育ったということが、それからの人生に、もう、計り知れない、暗い陰を落としたのです。コミュニケーションを作るのも、作

ったコミュニケーションをメンバーたちのイザコザで壊してしまうのも、それはそれで、メンバーの勝手です。関係のない外部の人間がとやかく言うようなことはありません。でも、私のように、自分の意志でコミュニケーションに入ったわけではなく、自分の意志で抜けたわけでもない人間から言えば、ローザや、その仲間たちは身勝手すぎました。いえ、身勝手などという言い方はやめましょう。あの人たちは、きつと幼なすぎたのです。年齢的なことを考えても、十代後半から二十代前半なんて、いったい世の中の何が見えていたと言っんでしょう。何も見えていない分、きつと純粹だったのでしょうね。ローザや仲間たちは、世の中は自分たちの思うように変え得るし、変えなければならぬと真剣に考え、世界の変革の拠点であるコミュニケーションを作ったのだと聞いています。その意気や良し、としましょう。けれど……」

僕にとつては、そしてもちろん会場の皆にとつても、きつと、よく知っている話ではあった。けれど、会場の皆は洋子の口からいちどきにこうやって聞くのは初めてだったのだろう、司会が言うまでもなく、会場は心をつにして洋子に聞き入っていた。そして僕はと言えば、話の内容より、洋子のたくましい変貌ぶりに驚かされ、会場と同じように、この話にのめり込んで聞き入っていた。

*

けれど、試行錯誤が許されることと、許されないことがあります。一度しかない幼少期を、そのような幼稚なコミュニケーションで、幼稚な教育理論で、幼稚な大人たちから育てられた子供がどのようなか、想像してみてください。

まずは、コミュニケーションの理論では、コミュニケーションは一つの大きな家族だとされました。だから、すべての大人が親であり、すべての子供は共通の子供でした。子供たちは、お父さんをお父さんとは呼ばず、お母さんをお母さんとは呼ばず、皆、それぞれのニックネームで呼びました。だから、私が今、ローザのことを「ローザ」と呼ぶのも、その名残なのです。

でもちよつと考えれば解るように、コミューンが一つの大きな家族になるなんて、あり得ないでしょう？ 大食堂でみんなで食事をとったり、子供部屋大人部屋でザコネしていても、やっぱり自分の子供は他の子供よりもかわいいし、自分の親を他の大人と区別するのも、人間にとつては当然だと思うのです。けれど、その当然さをこそ、コミューンの大人たちは問題にしたのでした。自分の子供を自分のモノにするところから私有財産制度が始まるんじゃないか。だから、共産主義を目指す以上は、子供からまずは共有しなければならぬ。子供が共有なのだから、当然、子供にとつては大人全部が親である、と。実にスッキリとした理論で、理屈では正しいかも知れませんが。けれど、理屈では割り切れないからこそ、人間は人間なのではないでしょうか。

今でも憶えています、あるとき、子供たちの二人が大喧嘩をして、一人がちよつとした怪我を足に負いました。私たち子供はその子連れてその親のもとへ行きましたが、親は「薬は医務室にある」とそれだけでした。子供が薬を求めて来たんじゃないことは百も承知で、そして自分の心の痛みも押さえて、この女性は「薬は医務室にある」と冷たく言い放ったのでした。今でも、私は、この女性の様子を目に浮かべることが出来ます。顔は心配でひきつっているのに、口では冷たく、薬は医務室、と言うのです。この、表情と言っていることとの矛盾が、コミューンの失敗をなによりも雄弁に物語っていると思います。

*

話を聞きながら、僕は小学生の洋子を思い浮かべた。

ある時、洋子が、教員から、何かの物語の感想を求められ、

「この主人公は、実にブルジョア的だと思います」

「もう少し詳しく説明して」と言う教員に向かって、

「ブルジョアも知らないんですか」

「うん、先生、よく知らない」

「ブルジョアも知らない人が先生をしてるんですか」

「ごめんなさいね。でも、本当によく知らないの。ブルジョアって、何？」

「ブルジョアとは、支配階級のことです」

「支配階級って？」

「この世は、支配する側とされる側で作られていて、支配するのがブルジョアで、支配されるのがプロレタリアです」

「こうやっていつも繰り返されるやりとりで、もう教室には失笑が始まっている。」

「で、どうしてこの主人公がブルジョア的なのか？」

「お金儲けしか考えていないからです」

「お金儲け？」

「金銀珊瑚って、お金と同じだと思います。主人公は金の亡者です。資本家の卵です」

「お金持ちはいけないの？」

小学生の洋子は芝居がかった、『啞然！』とでも言うような仕種をする。

「良いわけがありません。搾取した上に成り立つ富は人民に返さなくてはなりません。資本主義のイデオロギーをこの物語は振りまいています。私たちはこのようなイデオロギー攻勢に負けないようにしないといけません」

*

「コミュニケーションのモデルが何だったのか、よく調べないと解りませんが、多分、初期のソ連だとか、中国の大躍進とか、そのあたりだったのではないのでしょうか。もちろん、コミュニケーションそのものは本家本元よりはずっと幼稚だったと思います。だからまだ救いもあったのでしょうか……」

私たちの日常は、農作業と、演劇と、ダンスと、イデオロギー闘争とで明け暮れていました。演劇は、初期のソ連の児童劇の翻訳ものや、日本の古いプロレタリア演劇のものなど、今考えただけでもうんざりしてしまうような作品ばかりでした。こんなものを、毎日

毎日、練習していたのです。もちろん、おかげさまで、社会復帰してからも国語だけはいつも優秀な成績で過ごすことが出来ました。だって、今は使われていないような難しい漢字をも、本当に小さい頃から読みこなしていましたから。

それからイデオロギー闘争。というよりも、これは口げんかの稽古に過ぎませんね。口げんかとも言えないかもしれませんが。とにかく相手に「ブルジョアの」のレッテルを貼って黙らせてしまえばそれでいいわけですから。こういう議論を、容赦なく、仮借なく、徹底的にやることを、コミュニケーションでは教わりました。もちろん、これは社会復帰しても何の役にも立ちませんでした。むしろマイナスの遺産だったと思います。

とにかく、そういう世界だったのです、コミュニケーションとは。である日、崩壊しました。コミュニケーションの置かれていた地域の人たちとは、非就学児童の問題などもあって、もともとトラブルが絶えなかったことは想像に難くないですし、内部でもセックスの処理の問題などでかなりトラブルを抱えていたらしいことも後で知りました。最近調べたのですが、コミュニケーションが崩壊した後のあのマスコミ報道、まるで、フリーセックスを教義とした邪教集団の自滅、みたいな報道、あれもあながち事実無根ではないな、という気がします。

今でも憶えています。紅葉も盛りを過ぎた晩秋、コミュニケーションのあった山の斜面に続く急坂の道を、落ち葉を踏みしめながら、今の父母に連れられて降りました。私は悲しかった。友達が一人去り、二人去り、そしてついに私も出ていく日が来たのに、ローザは私と一緒に来てはくれなかった。後から聞けば、父母が奪い取るようにして連れて出たらしいのですが、私はローザに裏切られたと思いました。ローザはこっそり私にだけお菓子をくれたりしていたのに、肝心なときには一緒に来てくれなかった。ローザ、なぜここにいないの、なぜ私のそばにいてくれないの、なぜ私だけをブルジョアの世界に放りだしたの？ ローザを失った悲しみは世界への怒りに変わりました。私はブルジョア世界そのものと、たった一人の闘いを始

めたのです。

このブルジョア世界と闘い続けていれば、そうです、非妥協的に、徹底的に闘い続けていれば、いつかこの世界自体がああ懐かしいコミュニティのようになるんだ、そうになったらローザが迎えに来てくれるんだ、と。もちろん、ここまでしつかりと考えていたわけではありません。愚かな八歳の子供のことですから、コミュニケーションでやっていった通りを繰り返していただけないでしょう。ただ、それがいかに異常な行動だったのか、想像できますか？ もし想像できなければ、今日はその証人もお呼びしていますので……

*

いきなり洋子は僕の方にしつかりとした視線をくれた。会場の皆も、自分たちとは異質な人間が一人だけ混じっていることに最初から気づいていたらしく、一斉に僕の方を見た。何か発言を求められるのかと身構えたけれど、単に注意を喚起しただけらしく、洋子は話を続けた。

*

……後でお暇だったら話を聞かれたらと思います。

社会復帰して、私にはすべてが敵でした。私のいとこたち、今では本当のきょうだいだと思ってますが、姉が当面の敵でした。家に入るなり、私は姉がスカートをはいているのをまずは攻撃しました。お笑いぐさですが、コミュニケーションでは、スカートは男が女にはかせた屈辱の印だと教えられてきましたし、そしてそのようなブルジョア文化とは徹底的に闘うことと教わってきましたからね。

姉は最初、ポカンとして、そして自分が攻撃されていることを知って、静かに泣き始めました。

「泣くななんて！ それこそブルジョア的だ！ ブルジョア女のことだ！」

と、私は、姉の涙を見ても攻撃の手を弛めませんでした。どうやって父母が議論をやめさせたのか憶えていません。きっと父母も、ここまでひどい子供だとは思わずに引き取ったんだろうと

思いますよ。本当に、今考えても、私の父母の根気には頭が下がります。ローザと三つしか違わないのに、母は本当に大人でした。母からはもちろんぶたれたこともないし、激しく叱られたこともありません。

それに、後で知ったことですが、私にはその時戸籍さえなく、もちろん通学経験さえありません。そんな子供を学校に入れる手続きがどれほど大変か、今の私にも想像することさえ出来ません。ただ、母は、毎日毎日役所をたらい回しにされて、本当に大変だった、と笑いながら話します。そして、ある日、家に見知らぬおじさんがやって来ました。それで、私に、おじさんの持ってきた何冊かの本を声を出して読むように言いました。私はコミュニケーションでやっていった通り、演劇の訓練通りに読みました。おじさんが感激しているのが子供心にもわかり、嬉しかったことを憶えています。あとは算数の簡単な問題を出されて、これももちろんクリアしたのでしよう。じゃあ、来週から学校に行こうね、と言っておじさんは帰っていききました。ずっと後から聞いた話では、おじさんは教育委員会のお役人さんで、あの時は、本当に私という子供がそこにいるのかどうかということの確認にきたのだそうです。戸籍がないのですから、本人がそこにいるかどうかは見に来なければわかりませんからね。

今では私にも戸籍があります。でもこの戸籍を作るのは、就学よりも、もっと大変だったと聞きました。なぜなら、ローザは私を学校に行かすのは認めましたが、戸籍を作ることには猛反対したからです。

「それは私の負けになる」とローザは言ったそうです。「戸籍は天皇制維持の道具だ。臣民の登録簿だ。そんなものに私の娘を載せられるか！」と。

言いたいことは理解できます。でも、だからといって、私を巻き込まないでよ、という感じです。アナタの闘争と、私の人生とは何の関わりもないでしょう、と。

まったく、戸籍が無いせいで、健康保険に入るのも一苦勞だった

と母は言っています。ところがローザといえば、身分関係を登録する戸籍と、住民サービスのためにある住民票は別物だから、役所に交渉して住民票をまずは作らせたい、住民票があれば健康保険にもスツと入れるはず、などと、まるで高見の見物のような口調でコミュニケーションの後始末に励んでいたというのですから、何をかいわんやです。

母によれば、住民票を作るのに三ヶ月かかったそうです。ほぼ毎日役所の窓口に通い詰め、冷淡な役人たちを叱りとばし、市の助役になで会って、それで、いっさい口外無用ということで、やっと住民票が出来たのだと言っています。それでローザと言えば、

「ほら、私の言った通りやったやろ？」

ですって。ローザらしいというか、なんというか。

戸籍が出来たのは、それから何年かたって、父母が一計を案じて私の小学校卒業祝いにみんなでハワイ旅行に行くことにして、パスポートを取るためには絶対に戸籍が必要だから、ということでもうローザもかなり丸くなっていて、「戸籍の差別性が云々」などとツベコベ言わず、それまで出生届を出していなかった罰金とか、そういう手続きをしてくれるんなら、自分は判子だけは押す、と、そう言ったそうです。これで、生まれて十数年経って、やっと私は自分の戸籍を得たのです。もし戸籍を得る前に死んでいたら、最初からいなかった人がやっぱりいませんでしたってことになったんでしょうか。

そのころローザがどこで何をしていたのか、詳しいことは知りません。コミュニケーションの外で知り合った男性と一時同棲していたとか、住み込みで働いていたとか、ずっと後になって聞きました。私や父母とは没交渉に近い状態だったんではないでしょうか。

あの当時、私もだんだん父母に馴染んできて、コミュニケーションがいかにも異様な所であったかを理解し始めていましたし、そして、その結果として、ローザという存在をなんとなく疎ましく感じ始めてもい

たのです。

だって、考えてみてください。私に会いに来てくれるにしても、ローザって、いつも、ものすごい身なりだったんですよ。化粧っ気が無いのはまだいいとして、着てる服はほころんでいて汚いし、靴には穴が開いてるし、ひどいときにはズボンのベルトの替わりに縄を巻いてたこともあったんです。そんなのに連れられて遊園地なんか、喜んでは行けないでしょう。もちろん断るわけにもいかないし、会いに来てくれるのはやっぱり嬉しかったから、一緒に行きましたけど、私、もう、周りの視線が痛くて痛くて、もう少しまともな格好をしてよって感じてでした。

*

洋子の語るローザの風貌は、僕と会った頃のローザそのものだった。ただ、僕は他人だったせいもあったからか、あの風貌もローザに似合ってたむしろ愛すべきものだと思っていた。

ローザに初めて会った日から一週間くらい経った下校時、

「たツか、ひツろ、くーん」

いきなり甲高い声で名を呼ばれ、驚いて振り返ると、道の反対側から、リアカーを挽く薄汚いネエちゃんが大根を持った腕を振っている。

「誰や？」と聞く友人たちに何と云っていいかわからない。絶対に秘密と言われていたし、洋子の「本当のお母さん」という以外、ローザについて、その当時の僕は全く知らなかったから。

「八百屋さんや」と、友人たちにはウソでもホントでもないようなことを言い、こちらもおおざなりに手を振った。

「そっち行こかー！」とローザはまた叫んだ。これはタマランと思
い、

「こつちから行きまーす」と叫び返し、友人たちには「そんなら、また」とだけ言って横断歩道まで駆けだした。

これが運命の分かれ道だった。ここでもしローザを無視していたら。あるいはローザが来るにまかせていたら。そのあと僕が『ロー

ザ」に行くこともなかったろうし、そこでローザに自然食をこちそうになることもなかったろうし、食品添加物だのなんだのの本を借りることもなかったろうし、例のものをもらうこともなかったろう。とにかく僕は運命の横断歩道を渡ってしまった。そしてローザはと言えば、運命の女神よろしくやさしく笑みながら僕を迎えたのだ。Tシャツの上に被った薄汚れたコート、土にまみれたズボン、ベルト替わりの荒縄……でも、その時の僕は何も驚かなかった。僕のとつてのローザがまだ、アカの他人だったからだろう。

*

ローザには、中学の入学式には絶対に来て欲しくありませんでした。新設校でしたから、校区の線引きの関係で、私は小学校時代の友人がほとんどいない中学に入学することになっていました。だから、新しい学校で、心機一転、コミュニケーションのこととか、ローザのこととか忘れて、新しく出発しようと思ってましたからね。父母が話し合ってくれて、結局ローザは入学式には来ませんでした。

そして、入学式には来ませんでした。そのひと月後、ローザはとんでもない事件を起こしたのでした。

ローザは当時、福井のアパートに一人住んで、水産加工品何かを配達する運転手みたいな仕事をしていたのですが、それで、そのトラックごと中学に乗り付けたのでした。あれは昼休みでした。教室で友達とお弁当食べてると、廊下側の窓の向こうにローザが見え、私は走って廊下に出ました。ローザは私に、

「洋ちゃん……」と力なく言いました。

絞り出すような声で、様子も、そんなローザを初めて見るほど萎れていました。

「どしたん？」

「ちよつと、一緒に来てくれへん？」

ローザの言う「ちよつと」がどれくらいなのか、私の思った「ちよつと」とはかなりズレがあったようです。弁当箱の蓋も閉じずに放ったまま、それからの三日間、ローザと私とのセンチメンタルジ

ヤーニーが始まったのでした。

「ちよつと乗つて」と言われるままにトラックに乗ると、ローザはいきなり、

「私、死のうか思てんねん」

などと泣き始めるのです。

「どしたん？ ホントに」

「アンタ、これから私につきおうてくれへんか」

この状態で断れるはずがありません 私は心底驚いて、怯えてさえいましたから。だって、ローザが、というより、大人の女性が泣いているのを私はこの時ライブで初めて見たのです。それで、学校からトラックを出すと、男にフラれた、もう私にはアンタしかおれへん、お母ちゃんを捨てんとつてな、と涙ながらに話し始めました。その涙のトラックに乗ったまま、そういう、今なら痴話とでも言うべき話を私に聞かせながら、福井までです。それで福井で荷物を積み直したところにはローザの元氣も回復していて、そのまま私の下着とかの着替えも買い込んで一緒に東京へ車中一泊、それから青森に回つて一泊です。もちろん、楽しくなかったと言えばウソになります。ちよつと羽目を外して友達と遊んでいるような感じで、楽しかった。忘れもしない、この旅行中、私は生まれて初めて唇に紅をさしました。父母の躰はわりときつちりしていて、子供が口紅なんてとんでもないって感じていたから。

私にとって、これが、社会というものに触れた最初のお機会でした。それまで私は父の職場の人と会うこともなく、仕事がどんなものかも知ることもなく、ただ家の中で「子供」という役割を演じていただけだったのです。父母はきっと、私がきちんとした子供になるまで、社会からはできるだけ隔離しておこうと考えていたんでしょうね。今思つても、ちよつと閉鎖的な家庭だったような感じはします。だから、このローザとのセンチメンタルジャーニーも、本当なら、自分が初めて社会を見たという成人旅行みたいな感じで、いい思い出を抱えて帰宅できたはずなのです。実際、東京や青森の居酒屋で、

まるでアイドル的な存在だったローザにくつついて、違った言葉でガヤガヤと揉まれながら、恐ろしくもあり、楽しくもあり、旅自体は本当にいい思い出ばかりでしたから。

今でも思い出します。家のそばの国道の角にトラックを止めて、ローザはちよつと申し訳なさそうに、

「お姉ちゃんによろしくな」

そう言つて私を降ろしたのです。どこがよろしくでしょう……。ローザは父母の家には何の連絡もしてなかったのです。あとでローザは、

「気がついたらアンタをトラックに乗せとつた。もしお姉ちゃんになんか言つたらずきに連れ戻されるやろ」と、これです。

最初の夜、私の帰宅が遅いので学校に連絡を取った父母は、私が昼休みに女性に連れられて出ていったことを知り、それで事態のほとんどを悟りました。それでローザの職場に電話したものの、ローザからの連絡待ちだと言われ、こちらからは連絡のつけようがありません。そのあと、ローザは、職場には、自分から連絡するなどと言つておいて、結局何もしなかったのです。

父母がいちばん心配したのは無理心中でした。

母はローザの性格を知ってますから、いつか激発的に何かやりそうだとは思つてたみたいです。

それで、ローザとのセンチメンタルジャーニーから帰ってきた玄関で、安心と、怒りと、もって行き場のない憤りで歪んだ母の顔を見て、私も事態のほとんどを悟りました。

そして、事態を悟つて凍り付いた私に、

「おかえり」とだけ母は言つたのです。

大人の女性が泣くのをライブで見るのは、それが二度目でした。

*

運命の横断歩道を渡つた僕に、ローザはいきなり、

「孝弘君、すまんけどリヤカー挽いてくれへんか。私、一日中挽いとつたら腰がやられてもうて。もうこんなもん放つて帰ろうか思う

てたところやったんや。そしたら、向こうに孝弘君が見えるやろ、もう神様か思うて呼んだんや」

「ええですよ」と僕は言った。頼られるのはなんとなく嬉しかったから。

僕がリアカーを構えるとローザは後ろに回り、腕にちよつとした衝撃が伝わってきた。

「じゃあ、ええよ」と言われ、見れば、荷台には土まみれの野菜に混じってローザ自身が手枕して丸くなって寝ころんでいた。

こんなことで驚いたくらい、つまり僕はまだローザをよく知らなかったというわけだ。

*

ローザとのセンチメンタルジャーニーは、確かに親には心配をかけたし、複雑な家族関係を友達に知らせることもなったし、私にとってはよくない事件だったはずなのに、でもこの小旅行は、私に何か暖かい感情のようなものをもたらしてくれました。

私はそれまでずっと、宙に浮いたような、地に足の着かない感じを抱いて生きていました。もちろん、父母は優しくったし、姉も弟もよく躰けられていて、上品で、私もかなり馴染んではいたのですが、やはり心の核の部分ではこの家を拒絶していました。きっと、それがいくらコミュニケーションで形成された異様なものであったとしても、そしてこの家の人たちが正しいと解ったとしても、自分の核までも全否定することはできなかったんだと思います。きっと、私は心に殻を作ってたんです。理性と感性という分け方言えば、理性の部分では親や学校の先生に納得して従ってたんだけど、それはもっと心の核にある感性の部分を守るためだったんじゃないかと思うんです。感性の部分に殻を被せて、それを一生懸命守っていたんじゃないか。

私はそれまで泣いたこともなければ、心から笑ったこともなかったんじゃないかと思います。今思っても、小学生の頃の私は異様でした。子供なりに、外の世界から自分を守る闘いに必死だったんで

しょう。その頃の写真を見ても、私には表情がありませんから。きようだいたちと写っている写真を見たら歴然とわかりますが、もう少し笑ったり、驚いたりがあったっていいような場面で、私だけは張り付けたような笑みが写し取られているだけで、そこには人間的な感情が入ってないんです。カメラそのものを拒絶するような冷たい笑みで、今見てもゾツとします。

それが、ローザとのセンチメンタルジャーニーで一変します。母の苦しみを思えば、とてもとても『楽しかった』などとは口が裂けても言えませんが、でも、その時の写真が、もう何よりも雄弁に語っています。私に表情があるんです。東京の居酒屋でローザのファンたちに囲まれたときの恐怖と不安で泣きそうな表情や、それから車中の起き抜けを撮られたときの怒りの表情、面白いのは青森の食堂でおばあちゃんの言うことが聞き取れなくて困惑した表情、そして何より、紅をさした唇がちょっと大人っぽく笑んでいる表情……。

私はローザとのセンチメンタルジャーニーで生まれ変わったんです。大げさな言い方になりますが『生きてていいんだ』って、そういう感じですね。ちょっと違うかな。ローザのために『生きなければならぬ』って感じかもしれない。いや、これも大げさですね。ちょっと生意気だけど『自分は頼られてる』って感じが近いかな。ローザは自分を頼っている、自分は頼られている、私たちは親子なんだって感じですかね。そういう自己肯定みたいな感じを得たんです。それで、帰ってきた日の夕食時、聞かれもしないのに、旅行中のことをベラベラと喋りまくったのを憶えています。

「洋子ちゃんどうしたの？」

なんて母は聞いたものです。

「どうしたって？」

「そんなに喋って」

「だって、喋ることがあるんだもん」

そんな会話だったと思いますが、とにかく父母を驚かせたことは確かですね。

もちろん、旅の昂揚は家で一泊するだけで冷めきつてしまいました。そして逆にローザがしかしたことの愚劣さを悟ったのです。次の日、学校への足取りがものすごく重かったのもよく憶えてます。

*

リアカーを挽いて『産直の店 ローザ』につくと、ローザは半ば強引に僕を食事に誘った。

「いっぺんだけでええから、一口だけでええから、自然食を食べてみ」と言うのだった。

僕は仕方なく、ローザのためと言うよりは、洋子のためにその夕食に付き合うことにした。家には友達の家で食べてくるとウソの電話をしたのだったけれど、それは例の玉葱に続く二度目のウソとなった。

「自然食にはウソがあらへん」と、料理をしながらローザは言った。「最近の食べもんを見てみ、もうウソばっかしや。インスタントラーメンって言うたかて、あれラーメンちゃうやん。ニセもののウソつきが、『インスタント』って頭につけるだけでまるで準ホンモン扱いや、そう思わん？」

「でも、あれはあれで美味しいからいいんじゃないですか？」

「美味しい？ あれが本当に美味しい思うんか？」

「けっこう美味しいと思いますけど」

「ええか、それが問題なんよ。なんで、ラーメン屋の人が何日も前から仕込んだスープで作った本物と、たかが三分茹でただけのモンが、同じラーメンって言われて比べられて、しかもインスタントなんかかけっこう美味しいやなんて言われるの？ しかもインスタントの値段は本物の半分以下やろ？ おかしい思わんか？」

「工場で大量に作ってるからじゃないですか？」

「そこやがな。なんでラーメンを工場で作れるんや」

「さあ」

「結局は大工場で作れるようなもんなんや。あんなのは工業製品で

あつて、食品やない」

「工業で作ったら駄目なんですか？」

「規模つちゅうもんがあるやろ。食品つて言うたら、人が食べるモンなんやで。やっぱり、人が目の届く範囲の規模で作らんとどっかに無理が来る。見てみ、インスタントものなんか添加物だらけや。添加物をドンドン入れて、二セモノを本物に近づけようとしてるんや。それでも添加物なんかが安全なら、まだよしとしよう……」

「発ガン性ですか」

「孝弘君、よく知つとるな。基本的にはそういつこつちゃ。とにかく、安全性は二の次、三の次にして、いちどきに大量に作れるよう、作り置き出来るよう、持ち運びできるよう、そればかりや。でもな、それは工業の論理であつて、農業の論理やない。どんなに科学が進んだかて、工場だけでは食品は作れへん。食品は絶対的に農業に依存しとるんや。工業が食品作りで出来ることは、本当は農業のお手伝い程度のもんのはずや。それがいつの間にか、農業そのものが工業の論理に毒されてもうて、田んぼは油田にするわ、食品は工場で作らすわ、無茶苦茶になつてもうとる」

「だから自然食なんですか」

「それだけやない。もっと大事なことがある」

「健康ですか？」

「うん。それも大事や。けど、もっと大事なことがある」

「わかりません」

「自然食は、美味しい。それがいちばんや」

僕はローザの言うことにいちいち感心し、もっともだと思ひ、もつと話を聞きたいと思つた。つまり僕はローザのオルグ術にハマリかけていたというわけだ。

*

センチメンタルジャーニー事件から一年ほどして、ローザは私の家の近くに帰つてきて、産直の有機野菜の店を開きました。直接には、今日ここには見えられてませんが、ローザの新左翼時代の先輩

が有機農法のネットワークを作っていて、そのネットワークの店舗の一つをやってみないかと誘われたことがきっかけだったと聞いています。もちろん、それは直接のきっかけであって、もっと深いところでは、私の祖父祖母がともに消化器系のガンで相次いで亡くなったというのも動機としてはあったと思います。当時のローザは、この世の中はどうかしてる、まずは食べ物をなんとかしなくては、みたいなことを、よく言っていましたから。

あの頃、うちの家によくローザが店開きの相談に来て、それで父母が反対していたのを憶えています。まず、うちの父母には、インスタントが身体に悪いとか、残留農薬がどうか、そういう発想は皆無でしたからね、またローザがコミュニケーションみたいなことをやり始めた、としか理解できなかったんでしょう。

今でこそ「有機」って付けるだけで売れる時代になりましたけど、当時はもう、無農薬とか、有機栽培とか、そんなことを言うだけで変人扱いでしたから。もちろん、有機栽培をやったローザの先輩や、そのネットワークの人たちが変人揃いだったってのもありますけど。

ちよつと横道にそれますが、私が思うに、運動というものを最初にやり始める人たちっていうのは、何か、どこか狂った部分があって、自分が思いこんだらもうどうしようもなく、誰がなんと言おうが自説を曲げないし、反論されようが、反証されようが、絶対に我が道を行くっていうところがありますよね。皆さんも身に覚えがあることでしょうか、そういう人たちは、やっぱり世間から見たら変人です。

でも、その変人が自説を貫いていく中で、もしその説が正しかったら、変人でない人たちがついてきます。しかも、ついてくるのは変人ほど狂ってはいないけど、まあ少しは世の中のおかしさに気づいていて、それをなんとかしなくちゃと思っっているような人たちです。そんな、いつてみたら変人と常識人との中間にいるような、いわば半常識人たちが、今度は変人と常識人との間で翻訳を始めるわ

けで、つまり、狂信への理論付けですね。

だから、世間から見た運動なるものの印象が、一面で情熱的・狂信的であって、もう一面では理屈っぽいイデオロギー集団のように見えるのも、結局は、変人と半常識人との取り合わせから来るんじゃないかと思います。

で、ローザがどっちだったかと言えば、もう、もちろん、生粋の変人です。変人でなければ、あの時代に有機農産物の産直の八百屋を開こうなんて思うはずがありません。あの時代ですから、添加物や農薬の危険性を訴えたって、国が認めた物質がそれほど悪いモノであるはずがないってのが常識で、そこであえて、国が認めてるからこそ危ないんだって言いうるのは、これはもう、世間的に見れば絶対的な変人です。

*

「やからな」とあの日、料理を盛りつけながらローザは言った。「添加物や農薬が安全やという積極的な実験データはないんや。だって、人間の一生は八十年からあるんやから、そんなら八十年食べ続けて安全なんかどうか、データ出してみい、言うんや。そんなデータどこにもないやろ。マウスとか、モルモットとかで、何ヶ月単位、ひどいときは何週間単位でのデータだけで安全ってレッテルを貼るわけや。そんなんで、蓄積したときの身体への影響だとか、十年単位の長期的な慢性毒性とか、何も言えるわけないやんか。そう思わんか？」

「だったら、何を信用したらいいんですか？」

「簡単や。自分の舌を信用したらええ」

「でも、僕はインスタントラーメンも結構美味しいと思うんですけど」

「それは孝弘君がまだ本物の味を知らへんからや。本当の味を知って、舌を肥えさせたら、そのうち本物しか食べへんようになる」

僕はこの時はまだ半信半疑だった。

「さ、食べて」と目の前に並べられたのは、五歩づき米の混ぜご飯

の焼きおにぎり、豆腐と薄揚げの味噌汁、菜の花の漬け物、蕪の漬け物、鰯の開き、とそんなものだったと思う。なんか旅館の朝の食事みたいで、これで足りるんだろうかと思ったのを憶えている。そのころ家ではもっと洋風な、たとえばカレーとかハンバーグとか、そういう年頃の男の喜ぶようなアリガチなものばかり食べていたから。

ちよつと失望しながら、いただきます、と言って、味噌汁に口を付けた。一口目は味がないうな気がした。

焼きおにぎりは外側は軽く焦げていて、中はふんわりとしていて、ジャコやヒジキが香ばしかった。

漬け物は菜の花がほろ苦く、蕪は程良い酸味で、おにぎりと合わすと米が甘くなった。

最初に本当に美味しいと思ったのは鰯の開きだった。身の締まり具合といい、味といい、よくわからないなりに、これは違うと思った。「美味しいやろ？」

「はい」と僕は正直に言った。「家で食べるのと全然違います」

「何がちやうと思う？」

「魚そのもの？」

「それもあるけど、塩がちやうんやて」

「塩？」

「食塩いうんはな、ほぼ百パーセント塩化ナトリウムやろ。ここで使こてる塩はな、そんなニセモノちやうねん。海からとった塩に近い成分なんや、これで干物にすると、魚の旨味を最大限引き出してくれんねん。しかも天日干しや。干物を機械で乾かすとな……」

僕はローザのウンチクや説明を聞き流しながら、味噌汁をすすり、漬け物を囓り、おにぎりをほおばった。最初味が薄いと感じられた味噌汁は次第に滋味が感じられ、生まれて初めて味噌汁のおかわりをした。今度は豆腐にも出汁がしみていて美味かった。漬け物もおかわりした。今度は大根と青菜だった。これも青菜のつかり具合が絶品な歯ごたえで、塩味と酸味が程良く、食べたことのない味がし

た。結局おにぎりもおかわりして、鰯の干物は三枚、頭も骨もかじった。

「骨なんか残しゃええのに」

「もったいないですよ。美味しいですから」

「歯がええんやな」

「そうでもない、ですけど」

「なんにしても、若いコは食べっぷりがええわ……洋子ももっと来てくれたらええのにな」

「ここにはあまり来ないんですか？」

「うん。来たくないんかも知れへんなあ」

この時のローザのちよつと寂しそうな表情は今でもよく憶えている。

*

どういう経緯でかはよく知りませんが、私が中学の二年生のころ、ローザは、うちから少し離れた場所に店舗兼住宅を借りて八百屋を開きました。ところが、店舗兼住宅とはまあよく言ったもので、平屋の掘っ建て小屋に毛の生えた程度の建物の、道に面した半分が土間で店舗、後ろ半分が六畳一間の居住部分という、なんともみずばらしいシロモノでした。

「八百屋始めたから、遊びに来てな」

などと言われても、とてもとても、気楽に行けるような雰囲気ではありません。なんか、裏に幽霊がいそうで。もちろん、ローザの名誉のために言っておけば、もともと店舗は商品見本のショーウィンドーぐらいにしか考えていなかったみたいで、売り上げのほとんどはリアカーと軽トラでの宅配で稼いでいたと言います。

私の家もちろんローザの野菜をとりはじめました。けれど、夏の野菜にそれこそ、もれなく虫が付いてくるんです。これを母は嫌がって、その時期の青菜なんかは弟が洗い係でした。

それで、最初の夏、野菜についてきた虫を、弟が集めて飼ったことがありました。一匹づつ、野菜と一緒に一つのガラス瓶に入れて

飼うんです。

段々増えていく瓶に恐れをなして、母や姉は、

「そんなものガにしかなれへん、捨てろ」

って言うのに、弟は、

「ぜったいチヨウになる」

なんて言い張るんです。考えてみれば、幼虫の図鑑ってなかなかありませんから、弟も、毛虫はガに、芋虫はチヨウになるもんだと決めてかかっていたみたいです。私はといえば、虫そのものがどうなるかより、虫騒ぎの決着の行方の方が楽しみでした。意地悪な中立を決め込んだわけですね。

で、ある朝、弟が私と姉の部屋に入ってきました。そしてまだ布団の中にいる私の耳元に、姉には聞こえないような囁きで、

「洋ちゃん、サナギが力エった」

「なんになった？」

弟は無言で泣き始めました。

「ガになったんか？」

「うん」

「何色や？」

「ガ色」

ガが気持ち悪かったと言うより、きつと、母や姉の言うとおりになったことが悔しかったのでしょう。私は弟のそんな気持ちが何となくわかりましたから、こっそり起きていって、二人でそのガを外に捨てました。

そんなことが何度か続いて、遂にチヨウが出ました。モンシロチヨウでした。弟は得意げにしましたが、母は、弟が何度もガを捨てているのも知っていました。あとで母は私に言ったものです。

「子供はガになったとしても捨てられへん。チヨウになるかガになるかわかれへんモンって意味では、子育ても虫を飼うんも一緒かもしれんなあ」

母がなぜそんなことを言ったのかより、なぜそんな何気ない言葉

を自分が憶えているのか、そのことの方が最近は気になります。だって、母のこの言葉を聞いて、私は絶対に「ガ」になってはいけないんだ、この母のために「チョウ」にならなければならぬんだ、などと、子供心に決意したからです。

つまり立派な人間にならなければならぬんだということで、そして言うまでもなく、「ガ」の代表格はローザでした。

私はローザをいっそう避け始めたのでした。

*

「洋子、私を避けとるやろ」

あの夜、ローザは食後にビールを飲みながら言った。夕食から続けてもう何本目かわからないほど飲んでいた。

「そんなこと、ないんじゃないですか」

「孝弘君は、親と話なんかする？」

「まあ、するほうだと思いますけど」

「親ってウツトウしくない？」

「まあ、そう思うこともありますけど」

「大人やなあ。私があんたらのころは、もう親は全否定やったからな。戦争責任世代や言うて。まあ、幼稚と言えば幼稚やったわ」

「あの……」と僕は言い淀んだ。ローザをなんと呼べばいいかわからなかったから。

「ローザでエエ」とローザは言った。「戸籍に載つとる名前なんか忘れた」

「ローザさんのお父さんやお母さんは」

「死んだ。どっちもガンで。まあ、結構な歳やったからな……ホント、親っちゅうのはやっかいなもんやと思うで。首に縄を付けられて、縄の範囲で反発してるうちはまだエエ。大人になってな、自立して、親の本当の姿が見えてきて、ああ、やっぱり自分は本当に親を憎んでエエんやってわかる 때가来るんや。自分の反発は正しかったんやってわかる 때가来る。でも、もうその時になったら、親はもう昔の親やないんや。反抗とか反発の対象やあれへん。すつか

り弱つてもうた、ただの年寄りや。それで、今度は首に縄はあれへんけど、人情ちゅう縄でがんじがらめや。憎しみながらもどこへも行けへん。で、死んでもうたら死んでもうたで、なんで自分はあんなに親を憎んだんやろうつて、どうしようもない後悔や。生きてた時には嫌なことばっかしやったのに、死んでもうたら、今度は、楽しかったことやとか、優しかったこと、嬉しかったことばっかりが頭の中に浮かんで来よる。ホント、親うちゅうのは、やっかいやな」

「どうして洋子さんと一緒に暮らさないんですか」

僕は聞いてしまった後で、その質問の不躰さ、単刀直入さに自分で驚いた。けれどローザはそれまでと変わらない口調で、

「なんでやるなあ」と言った。「ボタンの掛け違いやな。なんかあの子とはズレるんやな。たった一人しかおらん子供で、あの子にとつてもたつた一人の親のはずなんやけど、人生の要所要所でズレるんやな。私にも、もうわからへん。……あの子ももう、私があの子を妊娠した歳やしなあ。考えてみたら、私も子供やったんやわ」

「洋子さんの」と聞きかけて、あまりの露骨さに僕は言い淀んだ。

「父親か？」

「……」

「さあ、誰やるなあ。ははは、誰だつてエエわ。もう関係ないしな。孝弘君はイヤか？ 父親が誰かわからん子なんか」

「そんなことないです」

「やろ。やつたらエエわ。あの子もなかなか男を見る目があるわ。孝弘君は、とにかく、あの子だけを見てくれとつたらエエ。私は私、あの子はあの子で、別人格やから。生まれるときは一人、死ぬときも一人や。そのくらいの覚悟はしとる」

*

例の、中学に入つてすぐに引き起こしたセンチメンタルジャーニ―事件は、友人たちに、私にちよつと変わった「本当の母親」がいるのだということを知らしめてしまったわけですが、でも、このことは、逆に、私の強烈な個性の由来を皆に説明し、結果的に皆を安

心させることにもなりました。あの事件以来、むしろ友人が増えたくらいです。私自身も事件後、なんか吹っ切れた気持ちになったのはさっきも言った通りですけど、周りもきつと変わってくれたんだと思います。私の本当の意味での社会復帰はこの時から始まったのかもしれない。

でも、こちらが社会に復帰していけばいくほど、こんどはローザとの溝が深くなることは避けられませんでした。だって、どう考えたって、ローザは向こう側の人間でしたから。向こう側の人間っていうのは、つまり常識とか世間とかから離れた場所で、自分だけの世界、自分だけの正義の世界に閉じこもることを良しとするような人という意味です。だから、こちらが社会化されていく分だけ、ローザとの溝は深く、広くなっていったのでした。

私はローザを避け始めました。そして私に避けられていることをローザも多分気づいていたでしょう、あまり私にかまってこなくなり、それ以後、私の中学、高校、大学時代を通じて、ローザを巡るトラブルは起きませんでした……。

*

洋子は嘘をついていた。もちろん、あまりにも禍々しくてここでは口になどできないだろうけれど。

*

……ローザと私とで、互いにとって適正な距離が見つかったのだと言ってもいいかもしれません。こうして、私にとってのローザは、表面的には、週に一回野菜を配達に来て、母と世間話をしていく人その程度にまで、存在感を落としていました。

いえ、もしかしたら、普通でも、思春期というのはそういうふうな親子関係が希薄になるものなのかもしれません。私は中学になって始めた卓球に夢中になっていましたし、勉強だって忙しかった。淡い恋愛だって知り初め、友人関係では悩んだりもしてました。そんな、思春期まったなかの女の子にとって、いくら本当の母親だとはいえ、同居もしていないローザの存在感が薄くなっていくのは

当たり前と言えはあたりまえです。

しかも私は東京の大学へと進学したあと、そのままアメリカの大学院に留学して、それから一度も帰省しない年もあったりして、十年前まで、ローザとは疎遠と言っていいような関係になっていました……。

*

僕にいわせれば、あれは「疎遠」なんてものじゃなく、まさに「絶縁」だった。もちろん、そんなこと、ここで披露できるようなことではとてもないけれど。

*

忘れもしない、金曜の深夜、ローザから国際電話がありました。疎遠になっていたとはいえ、やはり本当の母親ですし、日本語の懐かしさに、最初は、その声の重さ、口調の真剣さを感じ取ることも出来ませんでした。

「私、もしかしたら、ガンかも知れへん」
それを聞いて、私はなんといいかわからず、黙り込みました。

「ちょっと、一緒に医者に行ってくれへんか」
この時の「ちょっと」もまた、私とローザとではかなりなズレがありました。

「いつ行くの？」

「来週の火曜」

「私、今、アメリカなんやで」

「そうやな」と、ローザは寂しそうに言いました。「じゃあ、しょうがないから、姉ちゃんと行くわ」

「ちょっと待って、どの位アヤシイの？」

「医者は、私にはホントのことを言うてくれへんねん。やから、わからへんねん」

十年前ですから、まだガンの本人告知なんか一般的ではありませんでした。だから、ローザの言うことも、さもありませんなどと思っ

たものです。

私はちょうど博士号を取得した頃で、できればアメリカに残って研究を続けたい、と、アメリカの大学に残る道を探していました。遺伝子工学の分野ではやはりアメリカの方が先進国ですし、それに私は日本の外に出ることかなり解放された気分にもなっていましたから。

「来週の火曜は、私はなんぼなんでも無理やわ。お母ちゃんと連絡とって、一緒に行ってもろうて、それで結果を私が聞いわ。ローザにはそれから教えるわ」

そして火曜を過ぎ、母から結果を知らせる電話があり、やはり乳ガンで、かなり進行しているらしいことを知ったのです。ローザ自身にも全部知らせているから、私からの連絡は不要だとも言われました。けれど、連絡せずにはいられませんでした。

「どうしてやる」とローザは言いました。「私、ずっと食べ物とかには気をつけてきたのに、なんでやる。何が悪かったんやろ」

「何も悪くないよ」

「じゃあなんで、ガンになんかなるんや」

運よ、と言おうとして口をつぐんでしまいました。それでもその雰囲気はきつとローザにも伝わったのでしょう。

「天罰が下ったんやろか」とローザは言いました。

*

天罰、という言葉に僕の心は震えた。ローザはあの頃、よく、僕に、天罰が下るやろか、などと言っていたから。僕は身構えながら聞いた。酔いはすっかり醒めていた。

*

「天罰なんかあるわけないよ」と私はローザに言いました。

「ねえ、洋子、日本に帰ってきてくれへんか。手術の時、一緒にいて欲しいねん」

その時は一時間くらいの長電話になったんじゃなかったかと思えます。結局、私は学校の用事なんかがあって帰国できず、手術の時

は一緒にいてあげることとは出来ませんでした。そして、そのことを、私はその後、ローザからずっと責められることになるのです。

ケンカをすると、

「いちばん不安で、しんどかった時、一緒にいてくれへんかった。あんななんか娘やない」

と、いつもこれでした。

それで、私の反論はといえば、

「でも、今こうやって一緒に暮らしてるでしょう。ローザがどうしても一緒に暮らしてくれって言うから、私はアメリカのキャリアを捨てて日本に帰ってきたのよ」

まあなんとも、犬も食わぬような親子ゲンカですが、こういうケンカをくり返しながら、結局、九年半、私たちは一緒に暮らししました。もちろん、一緒に暮らしたと言っても、ローザも私も、それまでに自分一人の生活スタイルをしっかりと確立していましたから、ホントに、言ってみればシングル女性二人の共同生活に近いようなものだったと思います。

だって、そもそもローザの食生活に付き合うのは、私にはどうしても不可能でした。私の体質には玄米は多分合っていないくて、胃にもたれたり、下痢したり、不調が続くんです。ローザはきちんと噛めばそんなことはないとか言って、一口百回とか好きなことを言っていましたけど、朝の忙しい時間に玄米をゆっくり噛みしめてる暇なんかないし、お昼だって、硬い玄米おにぎりなんか食べてたら同僚とお話もできないでしょう。もちろん、ローザに言わせれば朝の化粧なんかナンセンスだし、同僚と昼休みまで一緒にいることがバカげてるってことなんでしょうが。

結局、一緒に暮らし始めて二週間で、ローザとは一緒に食事をする努力を放棄しました。

それに一緒に食事なんかしてたら、話題は私の仕事に触れてしまっただけ、お互いに不愉快になっちゃいますからね。だって、私は、ローザが不倶戴天の敵って思ってる製薬会社の研究員ですから。

「農薬が農業を破壊してる。化学合成された薬が人間の病気も増やしてる。アンタはそれに荷担してる加害者や」なんて。

言いたいことはわかりますが、だからどうしたらいいの？ って感じですよ。西洋医学は信用できないって言うけれど、アナタに診断を下して、手術を成功させたのは西洋医学でしょう、って。

「それは認める。でも、そのあとのフォローを西洋医学は何もしてくれへん。再発を防ぐんはもう個人の努力になってもうとるでしょう」

だから何？ って感じです。再発を防ぐとか、予防とかいう発想だって、西洋医学でしょう、って。

こうやって、二人の適度な距離を見つけるまで、ホントにケンカばかりでした。口を開けばケンカで、結局ローザとは、互いの生活には全く干渉しない冷たい無関心に行き着きました。

*

僕がローザと最初に夕食をとった夜、もう九時をまわり、帰りかけた僕に、「ちょっと待って」と、ローザはダンスの奥から何かを出してきた。

「もう洋子は、私があの子を妊娠した年やから、何があっても驚かんけど、でも、あんまり若くして母親になるってのも、やっぱりしんどいんや。妊娠さすんは、もうちょっと待ってくれへんか」

ローザが差し出したのは名前だけは知っていた避妊具だった。

僕はただ何と言っていいかわからず、受け取っていいものかもわからず、固まっていた。

「洋子にな、ボーイフレンドが出来たらまず私に紹介してくれって言ったのは、こういうことなんや。お姉ちゃん、洋子がお母ちゃん言うとする人な、お姉ちゃんには、洋子がもう妊娠できる年やなんて想像も出来へん思うねん。私にも憶えがあるし、洋子にも孝弘君にも、セックスするなとは言えへん。洋子も若いし、多分、そのうちするやろうとは思っねん。でも、その全部の結果を引き受けるにはやっぱり十代は若すぎんねん。やから、するときにはこれ使って、

な」

ローザはそれを紙でくるみ、僕のカバンに勝手に入れた。

*

最初の手術から五年が過ぎても、ローザは再発しませんでした。

見つかったときすでに進行ガンだったのに、五年経って顕著な再発が見られないことで、ローザは自分の生活スタイルに対してさらに自信を深めたようでした。

「自然食がガンを抑えとるんや。余命二年って言われたのに、再発もしてないで」

などと、野菜の配達先などで、自慢げによく言っていたものです。けれど六年目に転移が見つかりました。

「なんでや」とがっくりと落ち込んだ様は、はつきり言って哀れでした。ガンが見つかったときより、再発の時の方がショックが大きいと一般的に言いますが、ローザもやはりそうでした。

玄米も食べられなくなり、精米器を買ってきて、精白度の低いダイヤルで何度か精米して作った胚芽米を食べるようにしたのですが、この作業はとてつもなく面倒くさいんです。これを朝夕ですよ。精米してすぐの米しか、「酸化しとる」なんて非科学的なこと言ってローザは食べないし、かといって自分では「しんどい」とか言ってやらないことも多いし、こうして段々と、私の家事負担が増えてきました。私がマニキュアをやめたのはこの頃です。マニキュアのかけらが米に入るのをローザは極端に嫌がりましたから。

それで再発のショックから少し立ち直ると、ローザは、手術も抗ガン剤もいらん、と積極的な治療を拒否しつつ、得体の知れない民間療法を渡り歩きました。医学的にはプラシーボ効果って言いますが、そんなものでも効くことがありますから、私はするにまかせていたんです。ところが、母や、ローザの古い知り合いなんかは、「なんでローザにあんなことやらしとくんや、洋子ちゃんはアメリカで博士号までとった薬の専門家やろ」

などと言って私を責めるんです。でもですよ、効く薬があつて、

それを拒否してあえて民間療法に走っているというんなら、もちろん、そんなアホなことやめなさいっていいいます。けど、基本的なことを言えば、ガンに絶対に効く薬ってないんです。効くって言われる薬でも、効果が出るのは数パーセントの患者さんに対してだけです。すしね。だから、無理に抗ガン剤だとか手術とかを勧めるより、好きにさせてあげればいいって、私は思ったんです。それがローザらしいとも思いましたしね。

もう本当に、内にはローザのワガママ、外からは外野の押しつけ、で、一時期は私自身がおかしくなりそうでした。

食事だって、ローザの望むような料理を整えることが出来るようになるまでにかなり時間がかかりました。知つての通り、ローザは、ちよつとでも気に入らないところがあると文句の嵐で、

「そんなら自分で作ってよ」ってなんと叫んだことか。そのたび、「自分で出来るならやってるわ」って結構しつかりした返事が返ってくるんですけどね。

でもまあ、そういう、ワガママ放題、言いたい放題がよかったんでしょう。それに野菜の宅配の仕事も続けてましたし、生きる張りつていいですか、そういうのがあったんで、表向きはどこが病氣なんだろうつて感じてました。玄米を食べてた頃は痩せてたのに、胚芽米にしてからは太り始めましたしね。この遺影を見て、これがローザかとびっくりなさった方も多いと思います。肌の艶もよくなつて、実際、このまま奇跡的にずっと生きつづけるんじゃないか、と、非科学的なことを思ったりもしました。もちろん、奇跡は起こりませんでした。というより、奇跡が起こる前に、ローザは逝ってしまつたのです。

ローザは確かに自然食を続けていましたけど、身体に害があるものをすべて避けているというわけではありませんでした。皆さん知つての通り、ローザは大酒飲みでした。飲み会ではまずはビール大ジョッキ五、六杯を軽く飲み、それから日本酒五、六合、締めはウイスキーをロックで三、四杯なんて飲み方です。毎日の晩酌も欠か

しませんでした。

「大酒が飲めるように、自然食で身体を作っとるんや」

などと豪語していましたが。

でもさすがにガンが見つかったからは量だけは控えていましたし、再発したときは一週間ほど断酒もしました。けれど有機農法の農家との集まりではどうしてもハメを外して飲み過ぎることが度々でした。

あの夜もそうだったのです。

トイレに立ったローザの帰りが遅いので、皆で探しに出たそうです。

ローザは畑の向こうの崖から河原へ落ちていました。救急車を呼びましたが、即死に近い状態だったそうです。

一緒に暮らし始めたときから覚悟はしていたつもりでした。いえ、その日のために一緒に暮らし始めたようなものでした。でも、こんなかたちで最期が訪れるとは、本当に信じられませんでした。この時初めて、私には覚悟もなにも全く出来ていなかったことを思い知らされたのでした。今日この会を發起していただいた、篠原さん、佐伯さん、村山さんのお三人がいなかったら、私は何をどうしていかさえ、わからなかったことでしょう。本当にお三人には感謝いたします。

今日、ローザが逝って三ヶ月が経ち、それでも私にはまだ信じられないのです。私の中ではまだローザは死んではないのです。私の中のローザはまだまだ生きていて、私の仕事に文句を付け、料理に文句を付け、化粧が濃いと言っては難癖を付け、しているのです。こんなふうに、皆さんの心の中にも、一人づつ、ローザがいるんだろうと思います。その一人一人のローザを偲んでいただく会にするはずでした。でも、これは私のワガママに過ぎませんが、私のローザについて、私の知っているローザについてだけは、皆さんと共有したかったです。皆さんには、私のローザを知っていただきたいかったです。今日、私は生まれて初めてです。こんなに長くロー

ザのことを話したのは。

きつと、私にしか話せないローザがいて、皆さんにしか話せないローザがいて、けっして一人じゃないローザがいて、そういうローザの人生だったんじゃないかと思います。

今日はどうもありがとうございました。

*

万雷の拍手を浴びながら洋子は席に戻った。司会も、還暦ダコも還暦ナマズも泣いていた。ただ、僕は泣けなかった。洋子が話の中で意図的に避けていた部分の重さが、僕にただ悲しむことを許さなかった。

*

あの春の夜、ローザからもらった一ダースの避妊具を、僕は洋子と使うことはなかった。すべて、ローザと二人で使ったのだった。

(つづく)

第二章 ローザと洋子

高三の春、ローザから渡された例の避妊具に僕はある種責任の重さを感じ、逆に洋子とのつき合いには気持ちの上で慎重になっていた。こういうものを使つてはいけない、自分たちはそんな関係になつてはいけないとさえ思った。けれど、最初の頃は硬かった洋子の身体が日を経るごとに次第に柔らかく変化していくのを腕の中で感じ取るようになると、僕もやはり年頃の男だった。そして年頃の男らしく女の扱いについては無知で、どうやって次の段階へ進んだらいいのかもわからず、ただ、図書館の裏で、美術準備室のロッカーの蔭で、淡い抱擁を重ねつつ、自分の情熱をもてあましていた。

そしてもう初夏と言つていい季節がやってきて、互いの服も薄くなつていた。抱擁も、肌の堅さや柔らかさを感じあう官能的なものになり、もはや「淡い」とは言えなかった。

「なんか最近、ヘンヤ」と洋子は言った。

「何が？」

「孝弘君」

「別にヘンじゃないと思うけど。いつも通りやで」

「違う。何かヘンヤ」

そついうやりとりを抱擁の後で何度も繰り返した。

*

ローザに借りた本が僕の進路を決めた。実際、その本に書かれていた農薬や食品添加物やなんやかんやの危険性に震え上がり、これはなんとかしなければ、と思い、本を返しに行った『ローザ』の店先で、僕は、自分に今何が出来るのか、何をしなければならぬのか、ローザに聞いたほどだった。

「自分に何が出来るか、それを探しに大学に行くんじゃないの」とローザは言い、「でも、これから絶対に環境問題が社会的テーマになる。ならんはずない。やから、環境問題のことをきちんと勉強で

きる学科に入るのもいいかもしれん。理系やつたらツブシもきくやろし、理学部とか農学部なんかどうや」などと続けた。

そしてこんなアジに十七の僕は感じ入り、文系というつまらぬ選択をしたことを実に心から悔やみ、先生方に、理系へとコースを変えてくれと直談判した。ある先生はまず開口一番、洋子と同じクラスになりたいからとちやうやるな、と冷やかしてきた。でもこれは馬耳東風、環境問題を勉強したいんです、そのためには理系でないと駄目なんです、浪人も覚悟しています、などと、今思えば恥ずかしいくらい、熱く熱く、環境問題への情熱を喋りまくった。先生方は当初は全面拒否、けれど、面倒臭さからか次第に折れてきて、次の業者模試で理系の試験を受けてみる、数学で平均近くの点を取れたなら考えようという地点にまで折れてきた。それで僕は理系コースだった洋子にすりついて数学をやり直し、結局、試験では平均すれすれを取り、二学期からは理系コースへと移ることになった。

*

ローザのアジテーションにハマって次第にエコロジー関係にのめり込んでいく僕を、洋子は静観し、冷やかし、もう少し距離を置いたら、などとたしなめた。

「ローザの若い頃のこと、教えたるか？」と洋子は言った。

「左翼やった頃のことか？」

「そうや。ローザってあだ名もな、ローザ・ルクセンブルクから来とんやつて」

「ふーん」

「凄い思わん？ ローザ・ルクセンブルクやで」

「誰？ それ」

「孝弘くーん！」

洋子は僕の名を呼びながら、両手の平をソバ屋の出前持ちがやるように肩の高さにまで持ち上げ、呆れた、という身振りを見せてみせた。これは小学校以来のお芝居の仕種で、高校になっても洋子はこあるごとにこういうことをして男子たちからは蔭で宝塚の「ヅカ」

と呼ばれていた。

洋子は続けた。

「ローザ・ルクセンブルクも知らんと、これまでローザって呼んどったんか？」

「よくないか？」

「ものすごい有名な女革命家なんやで」

「ソ連の？」

「孝弘くん！」

「それはもうええ。で、それがどうしたん？」

「とにかく、ドイツの共産党の創始者で、オルグの達人やったらしいんや」

「オルグ？」

「孝弘くん！」

「それはもうええって言うとるやろ、しつこいで」

「やから、私が言いたいんはな、ローザの話は話半分に分かんとかんってことや」

「もし、俺がローザの話だけで進路を環境関係にしたって思とるんやったら、それは誤解やで。だって、ローザは確かに色々教えてくれるけど、基本的な知識は本からやで」

「その本はローザから借りてるんちゃうの？」

「いや、もう最近図書館から借りてきとる」

「ローザのお薦めを？」

「違うのもあるよ」

「でも、基本はローザやろ」

「ま、そやけどな、でも色々読んでも、ローザの言うことは間違っではないと思う」

「どんなところが？」

「食品添加物の問題とか、農業問題とか」

「それは認めるよ。でも、それと進路とは別問題やと思う。ローザの言うことに感心するだけならともかく、それで進路を決めてしま

うって言うのは、やっぱり、オルグにはまってると思う」

「いったい、そのオルグって何なん？」

「勧誘、みたいな感じかな」

「別に、勧誘自体は悪いことちゃうやん」

「それもそうやけど、あんまりはまりこむのはどうかと思うで」

と、まあ、こんな感じのやりとりを繰り返し、時にはそのまま触れた指先で求めあつて抱き合い、またある時にはそのままケンカ別れして翌日にはケロリと仲直りしたりした。

*

当時は共通一次試験というシロモノがあつて、国立大学はその合否得点ラインでだいたいのランキングがされていた。だから三年生になつて業者模試を受けるたびに志望校のランクを少しづつ上げていく同級生や、逆に下げていく同級生、さらには同じ大学の学部の志望を工学部から理学部、理学部から農学部へとクルクル変える奴までいて、いったいお前ら、大学で何がしたいんや、などと、ローザに会うまでの自分をさておいて、僕は洋子と二人、憤っていた。

というのも、洋子は早々と東京の大学に決めていたし、僕もローザの薦めで環境問題の権威のいる愛媛の大学への進学を希望していたから。自分はお前らとは違う、自分は社会のこと、学問のこと、そんな色々なことを考えて進路を決めているんだ、などという、ある種傲岸なエリート意識のようなものを僕はこのころ持っていた。「あいつら、何にも考えてへん」と当時の僕は傲岸にも言ったと思う。

「アホな連中はどうしようもないで」と当時の洋子も傲岸に答えたと思う。

*

夏休み最後の日曜、洋子と二人で『ローザ』へ行った。ローザが、夏休み中に一度三人でお好み焼きでも、と言っていたのに、洋子はなんだかんだと理由を付けて延ばしのばしにして、結局最後の日曜になつてしまったのだった。当日も、待ち合わせの本屋の店頭から

して洋子は不機嫌で、そこから『ローザ』までの数分間、僕らは全く口をきかなかった。

『ローザ』について上にあがってから洋子は黙って座りこんだきり、お好み焼きの用意を何一つ手伝わなかった。僕の方が氣を使つて、山芋をすり下ろしたり、紅生姜を刻んだり、焼き海苔をハサミで細く切つたりした。

洋子の顔は、何かに憤り、今にもその憤りを何かにぶつけたがつているようだった。そしてその憤りが、僕や、ローザにかかわるらしいこともなんとなくわかり、ローザは洋子には話しかけなかった。テーブルコンロが置かれ、フライパンが焼かれた。

油が引かれて生地が流し込まれると、ヂツという音がして、洋子は「熱ッ」と手を押さえた。

「大丈夫か」とローザは言った。

洋子は手を押さえたまま頭を振り、何も言わなかった。

「大丈夫？　水で流して冷やした方が……」

「いいの」と洋子は言い、また黙り込んだ。黙り込みながら、肩だけが小刻みに震えていた。肩までの髪がＴシャツの首筋に揺れ、何か凄艶な感じがした。

「大丈夫？」と僕は言った。

「大丈夫じゃ、あれへん」と洋子は絞り出すように言った。

「だったら……」

「放つとき」とローザは言った。

「その言い方、なに？」と洋子は顔を上げた。ただごとではない表情だった。僕は何が起こっているのか理解不能で、ただこの母娘を交互に眺めるしかなかった。

「なんで私が怒ってるのか、わかる？　ローザにわかる？」

「わかれへんよ、言うてくれんとわかれへん」

「私は、私は……」

「何？」

「私はローザとは違う！　結婚するまでセックスはせえへん！」

洋子の低い叫びを聞いて、僕は驚愕し、そして同時に、これだったのか、と妙に納得した。夏休みに入って最初の頃、例のモノをもらったことを洋子に言い、ローザには困ったモンだ、みたいな口調でそれとなく感触を探ったことがあった。洋子はその場では一緒に笑って、けれど次に会ったとき、抱擁をそれとなく拒否した。三日くらい経ってその次に会ったときには抱擁はしたけれど身体は硬かった。洋子が極端に緊張しているのがわかり、こちらも緊張し、硬くなった。僕らの何かが壊れ、どこか、もはや後戻りの出来ない場所へ来たのがわかった。

そして硬い抱擁を続けた夏休み最後の日曜に、これだった。

「結婚するまで、せえへん」と洋子は繰り返した。

「いや、する。絶対に、する」とローザは平然と言った。

「どうしてわかるん？」と洋子はちよつと甘えた口調で言った。僕や友人たちには絶対に聞かせないような声だった。

「あんたは孝弘君が好きなんやろ。孝弘君もあんたが好きやし、思いとどまる理由は何にもあれへん。機会ときっかけさえありゃ、起こることは起こる。セックスなんて、そんな程度のもんや。過ぎてみれば大したことない。セックス自体は大したことないけど、でも子供は別問題や。もし妊娠なんかしたら、その結果を引き受けるんはあんたや。あんたはまだそんな結果を引き受けたはないやろ。やから、孝弘君にお願いしたんや。そういうことや。そうやろ、孝弘君」

僕は何も言えず、ただうなづいた。

「洋子を傷つけたんなら、謝る。何か起こるならこの夏やって、私は勝手に思ってたから……」

「私を妊娠したとき、びっくりせんかったん？」と洋子はまた甘えるような口調で言った。

「ううん。もともと産みたかったからな」

ローザはまた平然と言い、お好み焼きの上に具を並べ始めた。今度は洋子も手近にあったエビを手でつまんで乗せた。

「行くで、気をつけて」

ローザは好み焼きをひっくり返し、コテで軽く押さえた。

「で、なんやったつけ？ あんたを産んだ理由？」

「うん」

「なんでやるなあ。あの頃の私の発想としてはな、セックスするのも当然、妊娠するのも当然、産むのも当然、結婚せえへんのも、出生届を出さへんのも当然やったんや。今でも、その考えはそう間違つてへん思うで」

「私はそれが正しいとは思えへん。私はきちんとしたい。結婚も、子供も、きちんとしたい」

洋子はそう言ってお好み焼きをコテでグイッと押さえた。脇からしみ出た生地をコテでまとめながらまた押さえた。ローザはその様子を気にしながら、

「きちんと、ねえ」

「そうや。私みたいなメには、子供は絶対あわせへん」

「どう思う？ 孝弘君。あんたもきちんとしたいん？」

「そうですねえ」と僕は言葉を濁した。

「あと五、六年、セックスせんと待つんか？」

「やめてよ」と洋子は今度は落ち着いた口調で言った。そしてお好み焼きをまたグイッと押さえた。

「あんた、それ、押さえ過ぎやで」

「押さえんとなかなか焼けへんやんか」

「お好みは育てるもんや。厚いのをゆっくり待ちながら焼くんがええんや」

「じゃあ、次のはローザの好きにして。これは私の好きにする」

洋子はもう一度お好みを押さえ、そのコテでひっくり返した。ローザはソースをかけ、鰹節の粉と、さっき僕が切った海苔と紅生姜をふった。

ローザは立ち上がり、冷蔵庫に向き合いながら、
「あんたたち、ビール飲む？」

「いえ」という僕の声と、「うん」という洋子の声が被さった。

「飲めるん？」

「少しだけね」

「私に似たんやろな。きつと飲みスケになるわ。じゃ、孝弘君は麦茶、私らは泡の出る麦茶やな」

僕らは乾杯し、さっきの湿った空気を払うかのように、学校のことや、進路のことや、世の中のことを話しあった。ローザと洋子は今度は友達同士のように笑いあっていて、こんな母娘関係もあるんだと新鮮に思ったのを憶えている。

そして『ローザ』からの帰り、公園の植え込みの蔭という実にアリガちな場所で、僕らは初めてのキスをした。互いの鼻が邪魔だった。

*

夏休みが終わり、僕は理系コースへ編入された。洋子とは別のクラスだったけれど理系同士の共通の話題が増えたのは嬉しかった。ただ、受験勉強はもはや佳境に入り、洋子とそうそう外で会うことは出来なくなっていた。

*

業者の模擬試験と定期試験とに追われながら、僕らは実に短期間に誰に教わることなく鼻をよけることをおぼえ、唇を湿すようになり、少しだけ舌を合わせたりした。そしてその間に秋ははや過ぎ、セーターを着込めば互いの肌を感じることは出来なくなり、僕は唇と舌だけの官能を、初冬の風に吹かれながら名残を惜しむように味わっていた。事実、順当に行けば春から二人は東京と愛媛の松山とに別れて過ごすことになっていて、その期限付きの逢い引きの純粹な気持ちは今思っても胸が切なくなる。

そして僕らは二人とも志望大学の志望学部、志望学科に合格した。

*

松山への引越はローザと同道することになった。

松山の隣街にローザが師と仰ぐ自然栽培の権威がいて、ローザは

もう何年も、その師のもとへずっと月に二度ほど通っていた。それでローザは、松山の街を案内するからと、僕の引越の日には自分の松山行きを合わせたのだった。

船に乗り込み、二等席の大部屋に荷物を置くと、洋子の本当の母親と枕を並べて神戸を去るという不思議さになぜか胸が熱くなり、目頭さえ熱くなり、すぐに甲板に出た。

出航時間が来て録音の銅鑼の音が鳴った。舳が解かれ、船はゆっくりと岸を離れていった。

僕は甲板の手すりから神戸の夜景が遠くなっていくのを眺めつつ、洋子を思った。もうあの街には洋子はいないのに。洋子はその三日前に東京へと発っていた。

大部屋に戻ると、ローザは缶ビールとカップ酒を買ってつまみも広げていた。

「孝弘君、ちよつと飲んでみん？」

「僕、お酒、飲んだことないんです」

「どうせ向こうに着いたら新歓コンパやらなにやらで飲まされるで、ここなら酔っぱらっても寝りゃいいだけやから、心配ないし、ここで自分がどの位飲めるんか、試しておいたら？」

ローザは紙コップに注いだビールを差し出した。両親は家では酒を飲まなかったから、僕自身、ビールを舐める程度に味わったことはあっても、本格的に飲もうと思って飲むのはこれが初めてだった。ビールは思ったより苦くなく、むしろ甘くないのがなんとなく感動だった。

「どう？ 飲めそう？」

「はい」

「日本酒も飲んでみる？」

ローザは飲みかけのカップ酒を差し出した。これは口にした途端、アルコールだという感じがした。

「お酒って、美味しいんですか？」

「この酒は不味いよ。だって、見てよ」

指さされたカップの蓋には『原材料 米 米麴 醸造用糖類 醸造用アルコール』と書かれてあった。

「お酒っていうのは、米と米麴だけで作るものやろ、本来。やのに、糖類をぶち込んで、アルコールで度数を増して、更には、やで、ここには書いてへんような添加物まで使って味を作つとんや。美味しいわけがあれへん」

「じゃあなんで……」

「酒にはね、美味しいなーって言いながら飲む酒、仕方なく飲む酒の二種類があつて、これは船の中でゆっくり寝つくために仕方なく飲む酒や。まあ、向こうに着いたら色々教えてあげるわ」

話し込んでいる間もなく、消灯だった。

*

早朝の松山観光港の堤防から見下ろした海はまるで別世界のように澄んでいて、僕はなんとなく嬉しくなつて深呼吸した。受験の時や下宿探しの時には余裕がなくて感じ取れなかった些細なこともが僕の五感に迫り、ひやりとした潮の香りが僕の胸を満たした。ここで自分は四年間を過ごす、と、不安と希望とが混ざり合った不思議な感情が、早朝の、湿った、それでも澄んだ空気と一緒に僕の胸を満たした。

観光港から私鉄の駅までローザについて少々浮かれて歩きながら、それでも心の奥には、この気持ちを洋子と共有できない寂しさを抱いていた。

*

洋子とは夏まで終わった。

帰省した神戸で、洋子から、もうお互いに縛りあうのはやめようと切り出され、僕も納得した。どちらも別に新しい関係が出来たというわけではなかったけれど、ただ、新しい関係へ向けての自由さが欲しかったのだと思う。

「何か私に言うことない？」と洋子は言った。

「これで最後のお別れって訳じゃないし、別に」

「じゃあ、さよなら」

元町の喫茶店で払いを僕に任せて出ていく洋子に何の未練もなかった。むしろ舞い込んできた自由に身軽ささえ感じていた。

結局は、高校という狭い人間関係の中での選択だった。互いに本気で好き合っていたのかどうかもわからない。そもそも洋子とは、付き合いました、そうしましょう、で始まった関係ではなかったし、であれば別れも何もない。ただ自然消滅していけばいい。と、その時はそんなことを思っていた。

*

ローザとは秋の学園祭で再会した。

大学で僕は環境問題を勉強するサークルに入っていて、それで学園祭でのイベントでローザの自然栽培の師匠を講演の講師としてよんだのだった。その会場に師匠と一緒にローザが現れ、当日、受付をしていた僕に、

「別れたんやて？」と素っ気なく言った。

「まあ、なんとなく」

「今晚、ちよつと飲めへんか」

「いいですよ」と僕は躊躇なく言った。大学に入学して以来、様々なコンパをくぐるうちに自分が飲めるクチであることに気づき、むしろ酒好きになり、誘われる飲み会には金の許す限りすべて顔を出すようになっていた。それに、ローザとは春に松山を案内してもらって以来で懐かしかった。

もちろん、今考えてみれば、別れたガールフレンドの母親と飲みに行くというのも変な話ではあるけれど、当時の僕にとっては洋子とローザとはなんとなく別個の存在としてあって、その別個の存在が偶然に母と娘であったと、そんな感じだった。だから洋子のことでは何か責められるとか、そういうことも想像できなかったし、事実、ローザにもそんなつもりは毛頭なかったろう。

*

「じゃ、乾杯」と僕らは学生街の焼鳥屋でジョッキを合わせた。口

ローザは中ジョッキの半分ほどを一気に飲み、ダン、と音を立ててテーブルに戻した。

「ああ、美味いなあ、街に出たらやつぱりビールやなあ」

「山小屋では飲めないんですか？」

「だって、冷蔵庫があれへんもん。日本酒ばっかしや」

「純米酒？」

「もちろん。孝弘君も自分で飲むんは純米酒にしときや」

「なかなか売ってないでしょう」

「デパートに行きやあるで」

「でも一人じゃ飲みませんからね」

「うん、その方がええな。寝酒とかやりだしたら、癖になってやめられんなるからなあ」

「でも、コンパじゃあ、もう無茶苦茶な酒ばっかしですよ。甘いし、二日酔いするし」

「本来なら若い人間の方がいい酒を飲むべきなんやろうけどな。で、大学は面白い？」

「面白いですよ。色んな人がいて」

「やるなあ。それで、学生運動なんかはないの？」

「セクトはあるらしいんですけど、何をやってるんでしょうね」

「まあ何かしとるんやろな。関わらんほうがええやろけど」

「ローザさんは若い頃、学生運動やったんでしょう？」

「学生運動ちゃうで。私は高校中退やから。でも、大学の周りをうるちよろして、ホント、かなりの数の人間の人生を無茶にしたで。

あれはいかんかった。本当に」

「内ゲバとか、そういうのですか」

「私らのときにはまだそこまで行ってなかった。ただ、内ゲバを始めたんは私らがオルグした連中やから、責任のいったんはあるやろな。それに、今になって思えば、私らの感情的なもつれが下の世代になって表面化したって面もあると思うよ」

ローザはジョッキを飲み干しておかわりを注文した。焼き鳥も最

初に注文した分が来た。その串をくわえ、身を歯で抜き取りながら、ローザは僕に視線をくれた。思わせぶりな、ちよつといたずらっぽい目で、洋子がよくしていたような表情だった。僕はちよつと照れて視線を外した。

「洋子とは駄目やったんやね」

来た、と思ったけれど、別に焦りはしなかった。そのことで僕を責めるつもりなどローザには全くだろうとわかっていたから。

「もう縛り合わないようにしようって」

「それって、別れたってことやないの」

「そういうことだと思いますけど」

「そうか。でも、うまくいけばよかったのになあ」とローザは言い、ジョッキ半分ほどのビールを一気飲み、今度は、カタリ、と小さな音を立ててテーブルに戻した。

「考えたらアホな話やけど、ずっと、孝弘君が洋子の子供の父親になるような気がしててな、やから、孝弘君を環境問題とかそっちの方向に引き込んだんや。洋子はずっとウチの野菜とか食べてるから遺伝子とかそう傷ついてないと思うんやけど、イブだけやあかんかな。アダムの方も気をつけたいもらわんと困るからって、そういう下心があつたんよ。でもなあ、十八の頃の自分を思っても、その頃の男とそうそう続くモンやあれへんしな」

僕は何も言えず、黙ってビールを飲んだ。ローザはビールのおかわりを注文した。

「後悔してへんか？」

「何をです？」

「環境の方面に進学したこと」

「全然、全くですよ。もしローザさんに色々聞かなかったら、結局はどこかのどうでもいいような文系の学科に入ってたと思いますし。そうだったと思つたら、逆にゾツとします。それに、友達だつてできましたしね。結構、ウチの学科って面白いんですよ。色んな所から色んな奴があつまってて」

「そうやるな。環境問題ってまだまだやってる学科少ないからな」
僕はそれから学科の先生の顔ぶれや、研究室に出入りしてイルカの解剖なんかを手伝ったりしたときのことや、友人になった男の恋人ぶりや、そんなことをずっと喋った。

「孝弘君はええなあ」とローザはポツリと言った。

「え？」

「洋子ももつと大学のこと話してくれたらええんやけどなあ」

「あんまり、話さないんですか？」

「あんまりなんてもんやない。まったく話さへんで」

「夏休みには会ったんですよね」

「大学のことなんか、全く話さんかったで。孝弘君とは別れたって言うんだけど」

ふうん、と僕は一抹の寂しさを感じて言った。

「だって、あの子は遺伝子工学なんてやろうとしてるんやろ。私からすりゃ、遺伝子に手をつけるなんて、悪魔の所行やわ。洋子も、私にそう言われることがわかつとるから、もう最初から大学のことなんか口にせんようにしとるんやろな」

「そうかも知れませんね」

大学のことや洋子のことや、なんだかんだと話しながら夜は更け、結局ローザは僕の四畳半の寝袋に泊まっていった。もちろん何も起こるはずはない。そのときの僕には四十の女性がまだ「女」でいるなんて想像さえ出来なかったし、ましてやそのときの僕が四十の女性を相手に「男」になるなど、絶対にあり得ないことだったから。

*

ところが、男と女の間にある得ないことなどないことをその冬には思い知ることになるわけで、つまり十二月に飲みに行った後で僕はローザ相手に初めて「男」になり、しかもそのすぐ後の冬休みには洋子ともヨリを戻してしまったのだった。

*

「カノジヨとか、出来た？」と洋子は高校近くの喫茶店で言った。

「どうやらな」と僕はアイマイに答えた。まさかローザはカノジョでもないだろうし、それでも、これまで三回も夜を共にした上に次の約束の日まで決まっている相手がいては、完全に一人というわけでもあるまい。

「昨日、ローザに会ったわ」

「そう」と僕は平静を装った。

「会ってるんでしょ、松山で」

いたずらっぽい目が僕の表情を探っていた。

これは何も感じていない目だとわかり、僕は、

「うん」と短く答えて洋子の反応を待った。

「ローザがカノジョ？」

「だったらどうする？」

「面白い。おもしろすぎる。大笑いする」

「洋子は、どうなん、カレシは？」

「出来たよ」

僕はちよつとショックを受け、どう反応していいかわからなかった。

「でも、別れた」

「なんで？」

「だって、すぐ、ヤラセロやらせろって、なんかガツガツしてるんだもん」

「結婚するまではって言ってたもんね、前に」

「と言うより、ガツガツしてるのを見たくないのよ。なんかオス丸出しで、情けなくって。けっきょく私はあの人にとっては一匹のメスに過ぎないわけで、そういうオスの目でしか私を見ていないんだってわかったら、なんだかイヤになっちゃうでしょ」

「オスとかメスとか、すごい表現やけど」

「でも、本当なのよ。もう、イヤになる」

洋子は東京言葉になりかけていた。それが逆に新鮮だった。
「俺もガツガツしてたかなあ」

「孝弘君は違うわ。孝弘君が私を大事にしてくれてたのはわかったし、そのことは別れてからもっとよくわかった」

「ガツガツするだけの勇気がなかったんかも知れへんで」

「同じよ。心の中でガツガツしてても、表面に出すかどうかはまた別の問題だから」

「洋子も色々あったんやな」

「うん。たった三ヶ月やったけど、縛りあわない関係になってよかったわ。視野が広がった」

そういう、決して核心に触れることのない会話を一時間ばかり続け、僕らは喫茶店を出た。そしてどちらが言うともなく、黙ったまま、初めてキスをした公園へ向かい、同じ場所で抱き合って唇を重ねた。

多分、洋子は、そのガツガツした男とキスはしたのだろう。そういうことを互いに探り合うようなキスだった。そしてふとローザの唇と比べている自分に気づき、一瞬ゾツとして思わず身体を離れた。

「どうしたん？」

「ううん、ちよつと寒かったから」

「外はやつぱり寒いね」

そう言って洋子は自分のマフラーを僕にもかけてくれた。僕はマフラーで繋がれた洋子をまた強く抱きしめ、パームされた長い髪を掻き上げながら頬から耳への産毛に唇で触れた。柔らかい髪からはコロンの香りが淡くたちあがってきて、これが普通の若い女なんだ、柔らかく、攻撃的でなく、いい匂いがして、これこそが僕に釣り合う女なんだ、と思った。そして洋子への愛おしさが戻ってきた。僕はローザのとの関係はもうやめようと決意しつつ、洋子の頬を抱き上げ、また唇を重ねた。

*

松山に戻り、ローザとの、洋子とヨリが戻っていらい最初のデーの日になった。僕は心の芯に何か堅さを含んだまま待ち合わせの店に行った。

ローザは炉端焼きのカウンターにチョココンと小さく、物思わしげに少々うつむいて座り、僕に気づくと顔を上げた。その物腰が堂々としている分だけ、小柄さと少年のようなショートの髪がどこか滑稽だった。ここでも僕はローザと洋子とを比べていた。

「よ！」とローザは軽く右手を挙げて僕を迎えた。

「待ちました？」と僕はローザの隣に座った。

「さっき来たところ。じゃ、注文しようか。まずはビールね」

ここでもう、僕はいつものようにローザのペースに乗せられてしまい、結局飲み屋では何も切り出せなかった。

下宿に二人で戻り、布団を整えながら、もう駄目だな、と思った。そしてじっさい、駄目だった。

この時僕はローザとの交わりを初めて味わったのだった。

一回目は飲み過ぎていたからか不発だったし、二回目は早すぎたし、三回目になって初めて交わりの構造と機能を理解できただけで、まだまだそれを楽しむとか味わうとかいうゆとりは持ち得ていなかった。

そして今回、快楽を共有することの楽しさを知り、まさにそれを堪能し、まだまだ荒っぽいけれど間違いなく本物のセックスの官能を味わったのだった。

「楽しかった？」とローザは初めて聞いてきた。

「うん」と僕は少しテレながら答え、達成感に満たされてローザの身体を抱きしめた。少年のような風貌なのに、出るころは出て、引つ込むところは引つ込み、ちゃんと女の抱き心地がするのが不思議だった。そしてまた僕はここでも、大柄でむしろフクヨ力と言っている洋子と比べ、それでも、もう、ゾツとしたりはしなかった。

*

それから何度も関係を重ねるうちに四畳半の下宿では壁が薄すぎて気になるようになり、ローザに連れられて初めてラブホテルというものに入った。部屋の真ん中にドンとある丸い広いベッドが何か滑稽だったけれど、それでも風呂はあったし、テレビもタダだった

し、下宿よりははるかに快適だった。

「何年ぶりやろなあ」とローザはベッドの中で言った。

「ラブホテルが？」

「うん」

「前はよく使ったん？」

「色んな相手がおったからね。妻のおる男とか、ね。そういう男とはこういう所でしかできへんし、な」

それを聞いてふと思った。

ローザはこれまで何人の男とやったんだろう。いや、過去のことはどうでもいい。それより将来、自分もその何人かの男のうちの一人として指折り数えられるだけの存在になるのだ。ローザにとって僕はそういう存在なのだ。

何か寂しさがこみ上げてきた。

「言うとかけど」とローザは言った。「私を好きになったらあかんで」

心を見透かされたようで恐ろしくなり、僕は何も言えなかった。

「こういう関係は割り切つとかんとアトがしんどいからな。私は結婚なんて関係にハマっていくことなんて考えてへんし、逆に言うたら、孝弘君を縛ろうとかいう気もさらさらあれへん。やから、お互いに好きの嫌いのなんて言うのはやめよな。もちろん、今は孝弘君が好きやけど、でも、人間の心なんてわかれへんもんやからな。孝弘君にも私とこんなことするん、やめる日が絶対に来るし、私の心だって、わかれへんもん。な、どっちかの気持ちが変わったときは、その時はスパッと行こうな。好きの嫌いのでスガリついたり絶対には絶対やめよ。約束や、私らは、どちらかが止めよう言うたら、終わリや。それだけはわかってヤロな」

気持ちも身体も萎えそうだったけれど、やってみればそんなことはなかった。それに、こんな格好いいことを言っていながら、スガリついてきたのはひと月後のローザだった。

*

春休みの帰省最後の日、洋子と僕は喫茶店を経て例の公園へと歩いた。

夜のフェリーで僕は松山へと帰ることになっていて、早春の薄暮の中で最後の口づけは帰省中に数度重ねたどの口づけよりも濃厚だった。

その最中、突然、洋子は僕を突き飛ばした。
ように思った。

「どうした？」

洋子の怯えきった視線の先を追うと、反対側の植え込みの中に人の気配があった。

石を拾おうとかがむと植え込みが割れ、ガサツとした音と一緒に二人の男が飛び出して、そのまま、まるぶように駆けていった。

僕もまた恐怖で身体が凍りついた。

洋子は震えて立っていらなくなり、僕はどうすることも出来ず、思いついたのが公園のそばにあるラブホテルだった。

「落ち着くまで、あそこで休もうか？」

洋子は軽く、硬くうなづいた。

*

僕はベッドの端に座り、椅子に腰掛けた洋子の様子を眺めていた。洋子は部屋に入って二人きりになるとだいぶ落ち着いたものの、自分の肩を抱きつつ小刻みに震えていた。とても口のきける状態ではなく、ただ時間だけが過ぎていった。

まさかシャワーを浴びにも行けず、あんなことがあった後でまたすぐに抱き合えるわけもなかった。僕はただ洋子が落ち着き、息を整えるのを待つしかなかった。

*

「ふう」と洋子は十分ほど震えた後で、身体を伸ばし、明るい顔で言った。

「大丈夫？」

「大丈夫。私、回復は早い。それに、よく考えてみたら、あの人

たちって、私たちよりも前からあそこにいたわけよね。そしたら、あれって覗きじゃなくて、ゲイのカップルだったんじゃない？」

「そうか？」と僕は植え込みから出てきた二人の様子を思い出した。確かにあの二人は二人組のデバ亀にしては年齢差がありすぎだし、年輩の男が少年と言っているような男を庇って走っていく様はまさに恋人同士に違いないと思われた。

僕らは顔を見合わせて笑った。

「こっちが悪いことしちゃったみたい」

「そうか、石投げんとしてよかった」

「ふう。でもこれで私も、ラブホテルって所に来たことになるんやね」

「うん、一応ね」

「しようか？」と洋子は言った。

「え？」

「冗談よ。実は今日生理なの。だからここに来たんやけど」

「なんや。期待したやん」

「したい？」

「うん」

「出来へんけど、時間までベッドの中にいようか」

「服、皺になれへん？」

「上着だけ着替えるわ」

そう言って洋子は口ブを持ったままバスへと消えた。

そして戯れに灯りを消した暗闇の中で淡いふれあいと口づけだけの時が過ぎ、僕らはやや慌ててそのホテルを出た。

出たところで後ろからヘッドライトを照らされ、クラクションを鳴らされた。

近づいてくるのはローザの軽トラだった。

屈託なく手を振る洋子の隣に立ちながら、僕はさっきの公園の事件の時よりも激しく動揺した。

ローザは僕らのそばに車をつけると、窓を降ろし、

「孝弘君、帰って来とったんやな」とわざとらしく、それでも自然に言った。

「はい、今晚のフェリーで松山に戻ります」と僕もわざとらしく、それでも出来るだけ自然に聞こえるように言った。

「これから二人で晩ご飯か？」

「飲みに行こうかって言ってたの」

「だったら、二人ともうちの店に來いへんか、鍋でもしょうや」

「店で？」と洋子は言った。

「まだ七時やで、じゅうぶん時間あるがな」

洋子は僕の方を見て、

「行く？」

洋子の目は『行こう』と言っていた。

「いいんですか？」と僕はローザに聞いた。

「じゃ、店で待つとるから」

去っていくローザの軽トラを眺めながら、僕はこれから起こることの禍々しさに今度は血も身体も凍りついた。

「行こ」と洋子は言った。

「うん」と、僕はやつとの思いで答えた。

*

「あんたら、あそこのホテルに入ったやろ」とローザは冗談めかした口調で言いながら、僕と洋子にビールを注いだ。

「さあ、なんのことでしょ」と、僕の顔をちよつと見た後で洋子は答えた。

僕らはグラスを合わせた。

ビールはそれ自体の苦さだけではなく、苦かった。

「あんたら、ヨリ、戻したんか」

「なんのこと？」と洋子はまた冗談のような口調で、それでも嬉しそうに聞き返した。

その屈託のなさが僕には重かった。

「若いウチはまあ、イロイロあるわなあ。羨ましいわ」

「ローザだつて、まだこれからよ」

「そうやるか」

「うん」

「ほんとにそう思う？」

「思うよ」

「孝弘君は？」といきなりローザは僕にふった。

すぐには返事が出来なかった。

「もう、ローザ！ なに聞いとんよ」と洋子は甘えた口調で抗議した。

「ねえ、孝弘君？」とローザは洋子を見捨てて言った。

「思いますよ。これから、だつて」

「よかった。孝弘君にもう終わつとるつて言われたらどうしようか
つて思った」

「言うわけないやん」と洋子は僕に代わって言った。

「ふう、羨ましいなあ。私も二十年前にあんたらみたいな関係を作
れとつたらなあ」

「私の本当のお父さん？」

「ううん、言うて悪いけど、あんたの本当のお父さんはそんな関係
を作る人やなかったし、そんなことは考えたこともない」

「革命家だしね」

「そうや。もう生死もわからんけどな。地下に潜つてもうて」

「そんな人がいきなり現れたら困るなあ、父です、とか言うて」

「私も困るよ。でも、認知も何もしてないし、父親言う証拠はどっ
こにもないけどな」

「ごめん、驚いたやろ、こんな話」と洋子は僕に言った。

「うん、少し」と僕は言った。実はローザからはもつとすごい話を
聞かされていたのだっただけだ。

「さ、もう煮えたやろ。豆腐はもうエエし、魚もエエ具合やと思う
で」

洋子の食べっぷりから見て、美味しい鍋だったのだろつとは思つ。

けれど、ローザの言葉の一つ一つは何かを探っているようで、また何も気づいていない洋子の明るさは逆に心に重く、その日の鍋は僕には全く味がなかった。

*

松山に戻るとサークルでは新入生歓迎行事の準備、また一回生のくせによく出入りしていた研究室では下働きが待っていて、それなりに忙しい時間が流れ、そして忙しくしている間だけは、三人でのあの恐ろしい晚餐を思い出さずにいることができた。

それが夜、下宿に一人になると、自分の置かれた位置や、やってしまったことの重大さが思いやられ、自分は何も積極的に望んだわけではない、結局は事態がそういう方向へと進んだのに流されただけで、自分には何も責任はない、などと、クドクドと、どうしようもないことを考えたりした。そしてそういうクドクドと考える一方では、実は何か誇らしいことをしているとでもいうような、まるで自分がドン・ジョバンニかカザノヴァかになったような気分さえも抱き、ひとりニヤついたりした。

そして突然、ローザが下宿に来た。

「連絡も何もせんと来て、御免な」とローザは言った。「もう来ん」と思いつたんやけどな」

僕は何も言えなかった。ローザを部屋に入れ、コタツをすすめた。「アンタはどう思てんの？ 洋子のこと」
どう答えていいかわからなかった。

「正直に言つて」

「好きですよ」

「洋子としたんか？」

「ううん」

「ウソやろ」

「してへんて。あの時、洋子は生理やったから」

僕はローザにあの日の状況を説明した。

説明しながら、全く説得力のないなあ、などと思っていた。

「洋子とヨリがもどったん、いつ？」

「冬休み」

「ほんまか？」

「うん」

「なんで、そのこと、私に言えへんかったんや」

「言えるわけなかったし、今さらそんなこと言ってどうなる、と言
いたかった。」

僕は黙り込み、うつむいた。

「なんとか言うてみ」

「何が言いたいん？ ローザ」と僕は顔を上げてローザを見た。

「私も」とローザは僕を見返しながら言った。「二股かけられたこ
ともあるし、かけたこともある。そんなことは別にどうだってええ。
その場で相手に出来るんは一人だけやし、それ以外の場所で相手が
何してようが、それをかまっとしたらお互いに窮屈や。そう思うて
これまで来たし、アンタともそれでエエと思とった。でも、洋子と
二股かけられて、これはちょっと、さすがに気分が悪い。アンタは
どう思う？」

「僕だつて、あまりいい気持ちはせんよ。洋子とヨリが戻ったとき
はもうローザとはやめようって思ってたんやで。でも、言い出す機会
がなかったんや……」

「言い訳やな」

何も言えなかった。目を合わすことが出来ず、うつむいた。

「遊ばれたとか、そういう下らんことを言う訳やないで、世間的に
見たら、私の方がアンタで遊そんどるとしか見えへんやろからな。
もう何もゴチャゴチャ言う気はない。ただ、私は、寂しかった。な
んでやろ、さびしかったんや。洋子とアンタとを両方なくしたよう
な気がして、どうしようもなく寂しかったんや……」

フーというような、太い息を吐くような声がして言葉はとぎれ、
見れば、ローザはコタツに肘をついて両手で顔を覆っていた。手の
甲の細かい皺が蛍光灯に照らされて小魚の鱗のように輝き、ローザ

の年を思わせた。

ローザは右手で涙を一度拭い、側に置いてあったティッシュを手で二三枚引き出して鼻をかんだ。そしてまたティッシュを引き出して涙を拭いた。

「洋子には、絶対、私とのことは黙っといてくれ」

「うん」

「約束やで」

「うん」

「それから」とローザは言い淀んだ。別れ話が出るんだろうと僕は身構えた。もう覚悟は出来ていた。

「私を……私は、捨てられとうない……今アンタに捨てられたら、私、イヤや」

想像もしていなかった言葉に僕はどう答えていいかもわからず、ただ、ローザを見つめた。

「どうせ遊びやねんから、いつでも別れられるって思ってた。けど、ちゃうねん。やっぱりダメやねん。今はまだ別れとうないねん」

僕はどう答えていいかわからなかった。

「いい歳して、寂しいねん。一人になりたくないねん。お願い、捨てんとつて、別れんとつて」

僕は一切の言葉をなくした。ただ切なかった。それまで何の实体も伴っていなかった「捨てる」とか「別れる」とかという言葉が、現実にはいかに生々しいか、その現場を見せつけられ、思考不能、判断不能、会話不能の状態だった。

「『捨てる』とか『別れる』とか、そういうんじゃないと思う」と僕はやっと言った。

「ごめん。そうやな、そういうんじゃないわな」

「ローザはどうしたいん？」

「これまで通り、したい」

その正直さに僕は少し感動し、ローザを愛おしく思った。けれどその感動には、ローザに対する征服感というのか、そういう優越感

も混じっていた。

その日、僕は下宿を出て飲みに行き、そのままラブホテルに泊した。

「天罰が下るやろか」と、ローザはコトを終えての枕語りで言った。

*

洋子との文通はだいたい二週間に一通ずつの割合で続いていた。ただ、洋子の手紙の方がいつも圧倒的に長く、結果として、孝弘君ももっとたくさん書いてよ、と不平とも不満ともつかぬ文句が便箋に踊ることになるのだった。ただ、洋子のは手紙と言っても日常の細々としたことがつらつらと書き連ねてある日記風のもので、とてもじゃないが僕にはこんな手紙を同量書くことは無理だった。

二年目の夏、僕の下宿に来たローザは、ちょうどその日に来た洋子の手紙を机の上に見つけて言った。

「あんたら、そんな分厚い手紙、やりとりしてんの？」

「やりとりというか、洋子のが物凄く長いんや」

「それ、読ましてくれへん？」

「そりゃダメやで。絶対に」

「洋子ったら、私には手紙も何にもくれんくせに、アンタにだけはそんな長い手紙よこしとるんやな」

「そりゃそうやで。僕だって、親には手紙なんか出せへんもん」

「ねえ、洋子、どんなこと、そんなに書いて来るん？」

「大学のことだけ。授業とか、先生のこととか、友達のこととか。」

「あんまり大学、気にいつてへんらしいで。不満だらけや」

「ああ、読みたいなあ。だって、洋子、何にも話してくれへんのか。前に三人で飲んだときも、しょうもないテニスサークルのことしか話さへんかったやろ。あの子がどんな勉強しとるんか、どんな友達がおるんか、やっぱり知りたいやんか。そんなことも書いとるんやろ、それには」

「もう、それはそれは細かく書いてるよ。日記やもん、まるで一日当たり大学ノート一、二枚にはなるんちゃうかなあ」

「ああ、読みたい読みたい読みたい！　ねえ、お願い、一生の願い、母親の願いや、見せて！」

「あかんで。バレたらどうなるか、恐ろしいやんか」

「バレんて。絶対にバレんようにするから」

「見せんかったら、どうする？」

「一生、アンタを恨む。一生呪う」

僕は仕方なくローザに封筒を渡した。

これが間違いの始まりだったのか、それとも、そもそも間違った道を歩んでいたのが正道へと修正されていく、その始まりだったのか、よくはわからない。

*

二年目の夏休みの帰省、洋子と僕は春の帰省の時と同じホテルに入り、ベッドの上で今度は何も着ずに抱き合った。僕は幾十の口づけを体中に浴びせ、すべてを愛おしむように、裏返したり、転がしたり、伸ばしたり、折りたたんだりしながら、手で、舌で、身体で、徹底的に洋子を愛した。こちらも初めてのフリをするとか、そういう余裕は逆になかった。まだ硬い洋子の身体と心をひらくにはそのくらいの努力が必要だったし、逆に、そういう努力があつてこそ、洋子とは最初から快楽を共有することが出来たのだった。

「満足した？」と僕は聞いた。

「満足以上。自分の中にこんな感覚があるなんて、初めて知った。でも、すごく疲れた。へとへとー。グニヤグニヤー」

僕らは布団の中で抱き合って息を整えた。

そして落ち着いてくると、洋子は、

「ローザがくれたアレ、どうした？」

その日はホテルに据え付けのものを使ったのだった。

まさかローザと使ったとは言えず、一瞬の間を置いて、

「アレ？　捨てた」

「どうして？」

「だって、使用期限、とっくに過ぎとったから」

「そう」

穏やかな返事に一瞬安心すると、その安心したスキを突くように、
「初めてじゃ、ないでしょ」

何も言えなかった。

そしていきなり馬乗りになられ、僕の喉には洋子の両の親指が置かれた。

洋子の顔は、ベッドのパネルの灯りで下から照らされ、まるで能面の夜叉だった。

「白状しなさい」

洋子は両手にじわりと体重をかけてきた。喉はかなり苦しくなり、どこまでが冗談で、どこからが本気か、わからなかった。

「初めてや、ない」と僕はやっと言った。

喉にかかった体重が少し軽くなった。

「誰と」

「洋子の知らん人」

「その人と使ったのね」

「うん」

「せっかく、ローザが、私のために買ってくれたアレを」

「ごめん」

洋子の顔には一かけの冗談も浮かんでおらず、どこかでこの手を払いのけなければ殺されるかも知れないと思った。

「孝弘君、アナタは私にも、ローザにも、非道いことをした」

「だって、あの時はもう洋子とは別れとったやんか」

「あの頃か…… だったら、冬に会ったときは、もうすでに孝弘君は知ってたわけよね、こういうことを。余裕があったはずね。向こうにも女がいたんだ」

「もう別れたよ、とつくに」

「ウソ！」

「ホントやって」

「私、ローザに聞くよ」

「何を？」

「孝弘君に松山でカノジョが出来てないか」

「そんなこと」と僕は怯えながら言った。「ローザはそんなこと知れへんて」

「いいや、ローザやったら、知ってるはずよ。ここを出て、すぐに店に行く。いい？」

*

刑場に向かう罪人のように、引きずられるようにして『ローザ』

につくと、僕らのただならぬ雰囲気にもローザは何か感づいた様子で、「どしたん？　まあ、上にあがってビールでも飲みや。晩ご飯は食べたんか？」

「ちよつとローザに聞きたいんやけど」と洋子はいつものように甘えた口調で言った。

「なんや」

「孝弘君、松山に女おれへんよね」

「そんなん」とローザは苦笑した。それは正に『苦い笑み』だったんだらうけれど、この場の雰囲気には実にふさわしかった。「知るわけないわ」

「だって、聞いて！　孝弘君ったら、向こうでカノジョ作ってたのよ」

「もう別れたって言うたやんか」

「それで、ローザが私のために孝弘君にあげたアレ、そのカノジョと使こたんやって」

ローザはだいたいの事態を察したらしく、僕の方を見て、安心しろ、とでも言うような笑みをよこした。

「だって、アンタは結婚するまでせえへんって言うてたやんか。アレだって使用期限あるんやから、無駄にするよりはええんちゃうか」

「ここでもエコロジー、言うわけ」

「ま、上がりや。干物でも焼くから、ビールでも飲んでいき」

僕らはローザが一人で晩酌していたらしいちゃぶ台についた。

コップが出され、僕らにもビールが注がれた。

「私は、許せへん」と洋子はローザに言った。

「許さんで、どないすんの？」

洋子は黙っていた。

「許せんのやったら、別れるしかないやんか。そんなら別れたらエ
エやんか。結婚しとるわけやなし」

「ローザは、一緒に怒っては、くれへんのやね」

「だって」とローザは軽く笑った。「もう別れたんやろ、孝弘君、
そのカノジョとは」

僕は仕方なく、硬くうなづいた。

「だったら、ええやん。今は洋子だけなんやろ」

僕はまた、仕方なくうなづいた。

「私は」と洋子はふてくされたように言った。「結婚までとか、そ
んなことはもう思ってたのにな、ただ、どっちも初めてだった
らしいなって思ってた」

「あんたら、したんか？」

洋子は照れた様子で、否定はしなかった。

「で、初めてやないって気づいたんやな」

洋子は何も返事せずに注がれたビールを飲み、コップを置いて、
ローザの晩酌のツマミらしいジャコの梅肉和えをローザの箸でつま
んだ。その仕種には何か勝利者の余裕とでもいうような落ち着きが
あった。

僕とローザは一瞬目を見合わせ、すぐにそらした。

心臓が止まりそうなほどの緊張があった。

「ちょっと待ってな。開きがそろそろ焼けたころや」

ローザはコンロへと立ち上がった。ちゃぶ台に二人になった僕ら
は一瞬目を合わせた。言いたいことを言って少し気分が落ち着いて
のか、洋子は少しテレた笑みを見せていた。

「尻尾の方が少し焦げたな。ま、焦げの部分は除けて食べて」

ローザが持ってきたのはサバの開きだった。柚子か何か、柑橘系

の香りがした。

「私、これ好き」と洋子は言い、ローザの箸をサバの腹に突き刺し、グイッと身をほぐした。子供のような奔放さだった。

「もう、行儀悪いなあ」とローザが言うと、

「お母さんみたいなこと、言わんとつてよ。ここでくらい好きにさせて」

「で、もう孝弘君は許してあげるんか？」

一瞬の間があり、洋子は僕の方を見て、

「許すわけやない」

けれど、仕種や声色が『許す』と言っていた。

「じゃ、仲直りの乾杯しようか？」

洋子は何も言わずグラスを掲げた。

この上なくグロテスクな乾杯だった。

*

洋子は色々と反発しながらも結局はローザのことが大好きなんだということとは前々からわかっていた。けれど、こんなことまでを、それもホテルを出たその顔で相談するとは、実に僕の想像を絶していた。やはり洋子は奇怪だった。けれど想像を絶すると言えば、高三の娘のボーイフレンドに例のモノを渡すというのも想像を絶して奇怪だったし、結局僕は、想像を絶する奇怪な母娘の双方と、それこそ想像を絶する奇怪な関係を結んでしまったというわけだった。

恐ろしかった。

けれど一方では、やはり、誇らしげな気分も抱いていた。ローザにスガリつかれて以来、ベッドの中でも主導権は僕にあったし、洋子とは無論、こっちにあった。何でも出来るし何でもしてくれる年上の愛人と、何にも知らないし、だからこそ好きなように教え込める処女の恋人と、その二人をほぼ同時に得て、僕は少し舞い上がっていた。

*

ローザとの、松山に戻って最初のデートは苦いものになった。

「わかつとつても、嫌なモンやな」とローザは飲み屋で言った。「あんなに嬉しそうにしとるん見たら、言うてなんやけど、私ら物凄う極悪なことしとるんやないかって、思えてきたわ」

その通りだと思った。

「洋子は初めてやったんやから、私るとき以上に優しくしてやったんやろ？」

返事できなかった。

なんと答えていいかわからない。

有史以来、僕のような立場でこんな質問を受けた男が十人以上いたとは思えない。

「私が、セックスが楽しいと思えるようになったんは、三十過ぎてからやわ。十代の頃はな、何か、因習打破！みたいな感じで、禁じられてるからこそ、むしろせなあかん感じやったんや。言うたらセックスは義務みたいな感じや。ちつともエエとは思わなかった。なんでこんなこと嬉々としてやりたがるんやろ、とか思いながらやつとつたなあ。相手の男にも愛情もなんも感じてへんかったし。それから二十代も無我夢中やった。よう憶えてへんわ。三十過ぎて出会った男からやな。楽しいとか、エエとか思いだしたんは。それに比べたら、洋子は二十前でもう楽しいと思える相手を得たんやから、幸せやわ。これって、母親としては喜ぶべきなんやろけど、でも、その相手が自分の相手やって思たら、嫉妬やらなんやら、二重の意味での嫉妬やらで、複雑や。ホントに、身から出たサビとは言っても、自分のこの気持ちをどうしてエエか、全くわかれへんな」

「もう、やめようか？」

言った後で、僕は自分の発した言葉に驚いた。

「そうやな」と落ちて着いた返事が返ってきた。「アンタが洋子と出来とる間は、私はやっぱり出来へんわ。でもな、お願いがあるんや」

「何？」

「洋子の手紙だけは、これからも見してくれへん？」

返事出来なかった。

「別に、見せとうないところはええねん。でも、洋子が大学で何しとるんかは、知りたいねん。なんか、娘の日記をのぞき見る親みたいやけど……」

この夜、ずっとローザに掻き口説かれ、結局、たまに見せると言うことで決着したのだった。

こうして、ローザとの肉体の関係は終わった。名残惜しさよりもむしろ開放感が勝っていた。

それは解放感と言ってもいいかも知れない。

今思えば、将来を束縛しあわない現在だけの関係というのは当時の僕にとってはむしろ重く、負担だった。しかも、ローザという存在は、実はそのころ松山で芽生え始めていた新しい関係への障害だとも、僕には感じられていたのだった。

*

それから一月に一度くらいローザから電話があり、僕は見せても構わないと思われるような手紙を幾つか持って飲み屋に出かけて行った。

飲み屋ではローザは酒に口をつけるのも忘れて洋子の手紙に読み耽り、最後の一通をパタリと閉じて深呼吸、

「ああ」と感極まったように「ありがとう。ホントにありがとう」

こういうことを繰り返しつつ、また、洋子とは帰省した時にホテルに通いつつ、四回生になって、僕は小さな環境アセスの会社に就職が決まり、洋子は進学を国内にするかアメリカにするかで迷っていた。逡巡の分だけ洋子の手紙は厚くなり、ローザは全部を見せてくれと懇願するようになった。

「あの子がアメリカなんか行ったら、どうしよう」とローザは気弱な声で言った。

「行っただけのことではないと思うよ」と僕は無責任に言った。

洋子との恋人としての関係は会うごとに冷めていたし、お互いに新しい相手がいることも暗黙のうちにわかりあっていた。ただ情性と、想い出を共有する相手への未練と、そして別れ話を言い出すき

っかけの欠如とで、関係が続けていただけだった。

洋子がどこへ行こうが僕にとつてはそれほど問題ではなかった。
「いいや、あの子はアメリカに行ったら、向こうの方がエエに決ま
つとる。あの子の感性は日本人離れしとるから」

「うん。それはそうかもね」

「やろ。ああ、どうしょ」

「洋子、ローザには相談したりはせんのか？」

「するもんかいな。お姉ちゃんにも何も言わへんらしいし。アンタ
だけで。こんなこと知つとるんは」

*

そして洋子はアメリカの大学院に行くことになり、手紙で知らせ
てきた。

飲み屋でそれを読むなり、ローザは、

「アカン、アメリカは、アカン」

そういつて絶句した。

次の朝、下宿の電話に呼び出された。

松山に来て初めての、洋子からの電話だった。

「私の手紙、ローザに、ずっと見せてたのね」

脳から血の気が引いた。スーッと引く、その音さえも聞こえたほ
どだった。

「ローザと出来てたのね」

違う、と言いたくて、何も言えなかった。

「ローザに伝えて。昔から親でも娘でも、なんでもなかったけど、
やっぱりあなたとは他人でしたって。他人でなきゃ、こんなこと汚
らわしくて、あんまりですって。もう一生、あなたたち二人に会う
ことはありません。お幸せに」

切れた。

これ以後、十七年の間、僕は一度も洋子の声を聞くことはなかつ
た。

*

『偲ぶ会』での洋子の話はローザの最期に入っていた。

「……トイレに立ったローザの帰りが遅いので、皆で探しに出たそうです。……ローザは畑の向こうの崖から河原へ落ちていました。救急車を呼びましたが、即死に近い状態だったそうです。……一緒に暮らし始めたときから覚悟はしていたつもりでした。いえ、その日のために一緒に暮らし始めたようなものでした。でも、こんなかたちで最期が訪れるとは、本当に信じられませんでした。この時初めて、私には覚悟もなにも全く出来ていなかったことを思い知らされたのでした。今日この会を發起していただいた、篠原さん、佐伯さん、村山さんのお三人がいなかったら、私は何をどうしていいかさえ、わからなかったことでしょう。本当にお三人には感謝いたします。……今日、ローザが逝って三ヶ月が経ち、それでも私にはまだ信じられないのです。私の中ではまだローザは死んではないのです。私の中のローザはまだまだ生きていて、私の仕事に文句を付け、料理に文句を付け、化粧が濃いと言っては難癖を付け、しているのです。……こんなふうに、皆さんの心の中にも、一人づつ、ローザがいるんだろうと思います。その一人一人のローザを偲んでいただく会にするはずでした。でも、これは私のワガママに過ぎませんが、私のローザについて、私の知っているローザについてだけは皆さんと共有したかったです。皆さんには、私のローザを知っていただきたかったです。今日、私は生まれて初めてです。こんなに長くローザのことを話したのは。……きつと、私にしか話せないローザがいて、皆さんにしか話せないローザがいて、けっして一人じゃないローザがいて、そういうローザの人生だったんじゃないかと思います。……今日はどうもありがとうございました」

万雷の拍手を浴びながら洋子は席に戻った。司会も、還暦ダコも還暦ナマズも泣いていた。ただ、僕は泣けなかった。洋子が話の中で意図的に避けていた部分の重さが、僕にただ悲しむことを許さなかった。

「大変感動的なお話で」と司会がマイクに戻った。「私自身、言葉

をなくしてしまいました。今はちょっと何も言えません。皆さまは、これから、だいたい九時まで、この会場をとっておりますので、ご自由にご歓談の上、ローザを偲んでいただけたらと思います」

還暦ダコがまた僕に話しかけたそうにしてビール瓶を差し出していた。僕がコップを向けると、

「洋子ちゃんは、立派だねえ」

「ええ」

「でも、あれで、まだ一人らしいね」

「そうなんですか？」

僕は本当に驚いて言った。発起人三人の名前で『偲ぶ会』への招待状を貰い、参加しますのハガキを送り返しただけで、今回、洋子との直接のやりとりは何もしていなかったから。

「なんだ、そんなことも知らないのか」

「ええ、実は今日、洋子さんとは十七年ぶりなんです」

「十七年！ そりゃすごいや」

「おい、また若い人に絡んでないか」とまた還暦ナマズがやってくる。

「この若い人、洋子ちゃんと十七年ぶりなんだってよ」

「ワシらやって二十五年ぶりやろ」

「そうか……そうだな」

などと言っている間に洋子が来て、

「今日はどうもありがとうございます」

などと言いつつテーブルのビール瓶を持ち、還暦ダコが『もうウイスキーだから』とグラスを指すのには軽く会釈して、還暦ナマズのコップに注ぐ。

「今聞いたんだけど、この若い方と、洋子ちゃん、十七年ぶりなんだって？」

「ええ。まあ、事情は、とっても複雑なんです。ね？」
と僕に。

「ちよっと、ですけどね」と僕は還暦ナマズへ返事する。

「じゃ」と洋子は僕にも注ぎつつ、「いきなりだったんで、ビックリしたでしょう。あなたの住所、高校の同窓会名簿で調べたの」

「ああ本当。でも、連絡とつてくれて本当に良かった。洋子さんも大変やったね。日本に帰ってきたなんて」

「最初はイヤやったけど、今では良かったと思ってるよ。ローザと最期の十年、一緒に過ごせたしね」

「十年ね。でも最期は残念やったね」

「うん。あんな形で終わるとは思いもせんかったから」

「ホントやねえ」

「孝弘君は、結婚したんよね」

「もう中学の息子と小学の娘がいてる」

「息子さん中学生なん！ そっかあ。卒業してすぐに結婚したもんね」

「知ってたの？」

「典子って憶えとる？ あの子が知らせてくれたんよ。お節介やろ。私、アメリカで、ちょっとシヨックやったんよ、実は」

僕は何も言わず洋子の顔を眺めた。老けたという感じはなく、年相応に綺麗になったという印象だった。

「お仕事はどう？」と端正に紅の引かれた唇が言った。

「ボチボチやね。でもこれから公共事業減るやろ。アセスの仕事も減って行くやろからね、田舎の会社やし、みんな心配してるよ。これからどうなることかって」

「心配ね。でも、そんな状態で来てくれたんやね。今日、泊まりでしょう？ 明日休みとったの？」

「うん。まあ、月曜日ってのはあまり仕事無いから」

「本当はこの会、土曜日にしたかったんだけど、会場が空いてなくて、それに、もう勤めから降りてる人が多いから、日曜でもいいかって、今日にしたのよ」

「いいんじゃないの。僕のこと言えば、そうでもしないと休みはなかなか取れないから、ありがたかったけど」

「そう言ってくれると嬉しいわ。じゃ、そろそろ御免なさい。あちこち回らなあかんから。今日はありがとう。たくさん飲んで食べて、楽しんで帰ってね」

そう言つて洋子は立ち上がり、

「あ、そうそう」とまた戻ってきた。

「孝弘君、メアド持ってたら、教えて」

僕はメアドの載った名刺を渡した。

「ありがとう、じゃ」

洋子はこんどこそ隣のテーブルに去った。

「なんちゅう、なんちゅう、エエ女になったんや」と還暦ナマズが感極まつたように言い、還暦ダコがうなづいた。

確かに、言葉づかいといい、身だしなみといい、立ち居振る舞いといい、洋子は同じ年頃のローザとは対極の、実に上品で洗練された女性になっていた。

*

『偲ぶ会』は九時すぎには終わり、洋子以外に誰も知己のない僕は二次会にも行かず、実行委員会が予約してくれていた、宴会場と同じホテルの自分の部屋に戻った。そしてシャワーを浴びて浴衣に着替えセミダブルのベッドに腰掛けて神戸の夜景を眺めると、それが学生時代にフェリーからよく眺めた夜景と重なり、まるで二十年の時が一瞬で蒸発したようだった。僕は二十歳かそこらのままで、洋子も若いままで、そしてあのころのローザがすぐそこにいるような気がして、切なかった。

*

十七年前、洋子からの最後の電話があつた日の夜、下宿で「絶縁やつて。もう、電話にも出してくれへん」と大泣きするローザを慰める言葉は僕にはなかった。

「天罰やるか」とローザは言った。

涙と鼻水とで崩れたローザは極端に醜く、こんな女と一時期でも肉体関係を持っていたことに思い至り、その時僕は猛烈に後悔した。

「東京に行つて、ちゃんと説明したら」

「聞いてくれると思う？」

「わからへんけど。それしかないんちゃうか。もう俺には二度と会わんつてことで、洋子に許して貰うほか、ないやろ」

長い沈黙があつたのは良く憶えている。

その夜でローザとの関係も切れた。

数日後、洋子から、僕宛の手紙を全部返してくれ、とだけ書かれた手紙が来て、段ボール箱一箱分の手紙を送り返し、洋子とはこれで完全に切れた。

こうして洋子ともローザとも切れ、何かスッキリした気持ちで僕は当時の松山のガールフレンドとの関係を深め、そして卒業し愛媛の会社に就職して、このガールフレンドと結婚した。それからはずっと同じような日が過ぎ、同じような週が過ぎ、同じような月と年が過ぎ、今年もまた去年と同じように過ぎていくものだと思つていた、その繰り返しの日常を引き裂いたのが『偲ぶ会』の案内状だった。それはまるで二十年前から飛んできた刃物のように僕の胸に突き刺さった。このハガキを受け取つて、僕はひどく混乱し、逡巡し、ギリギリまで返事を出すことができなかった。

返事を出してから、本当に「出席」でよかったのだろうかとまだ逡巡は続いていて、そしてその逡巡の感覚は『偲ぶ会』そのものが終わってしまったあとでもまだ消えてはいなかった。

*

部屋のドアがノックされた。

洋子？ と期待して駆け寄り、確認もせずには開けた。

「ごめん、ちょっと匿つてくれへん？」

僕の顔を確認するなり、洋子は返事を待たずに滑り込んできた。

「どうしたん？」

「閉めて！」

廊下から『洋子ちゃん』と叫ぶ声が聞こえ、僕はドアをいそいで閉めた。

廊下を通り過ぎる『洋子ちゃん』の声が消えていくのを待ちながら僕は顔を見合わせ、そして笑みを交わした。例の『呆れた』ポーズで笑う洋子は二十年前とまるで変わっていなかった。

洋子に歩み寄ろうとして、再びドアがノックされ、油断していた僕は「エエツ」とでも言うような、みつともない声を上げてしまった。

覗きレンズから見ると還暦ダコと還暦ナマズだった。

「はい、どなたですか？」

『あ、ここ、あの若い人や』と還暦ナマズの声がした。『ちよつと開けてえな』

「少々お待ち下さい」

洋子はクローゼットに隠れる、という身振りをした。

ドアを開けると、いきなり還暦ナマズが部屋を覗き込み、

「洋子ちゃん、来てへんか？」

「いえ」

「おれへんのや。『ちよつと』言うて出ていって、部屋にも戻って来いひん。どっかの部屋でつかまっとるんちゃうるか思うてな」

「はあ」

「もういいよ」と還暦ダコ。「洋子ちゃんも迷惑かも知れないよ、で、アンタ一人？」

「ええ」

「洋子ちゃんは今もういいから、もう少し飲もうよ」とウイスキーの瓶をかかげ、「俺は若い人のローザの想い出話を聞きたいナア。だって、僕らが知ってるのは二十歳前のローザだけなんだよ」

「アンタは、ローザ、知ってはるの？」

「ええ、少し」

「ほらね、一次会じゃ、僕らの話、聞かすだけだったじゃない。僕は聞きたいナア」

「でも、僕、明日が早いんで」

「マアちよつとだけいいじゃない」

押し問答をするのもどうかと思われ、僕は二人を中に入れた。

*

部屋にあった湯飲みやコップを動員してウイスキーを注ぎあった。テーブルの椅子には二人が座り、僕はベッドの端に腰掛けた。クローゼットの中の洋子を思うと腰掛けるどころではなかったけれど。

「エエ景色やな。ワシラの部屋、山しか見えへん」

「高三の頃、洋子さんにつれられて、ローザさんの店に行ったんですよ」

僕はこの二人を早く追い出したいくて、自分でも唐突だと思いながらローザの話を切り出した。

「いや」と還暦ダコは僕の言葉を遮った。「ここだけの話、アナタ、ローザと寝た？」

僕はいきなりのことに驚き、還暦ダコを見据えつつ首を振った。

「ほら、若い人はもう、そんなんちゃうて」

「ワシラはようお世話になったもんやけどな。今日来とった連中、ほとんどはローザにお世話になっとったんちゃうか」

「洋子ちゃんの父親だって、それが誰だか、本当のところはローザにもわかってなかったと思うんだ。だから、洋子ちゃんはみんなの子供なんだよ」

ナマズとタコは、しばらくの間グネグネとウネウネと洋子の父親探しに興じ、醜態だった。いつ洋子がクローゼットから飛び出してこないかと、気が気じゃなかった。

「まあ結局、わかれへん言うことや。やから、ローザからカンパ無心されても、みんな断られへんかったもんな。洋子ちゃんのため、言われたらな。それにそれを洋子ちゃんは無駄にせんかった。アメリカで博士やで。洋子ちゃんはどうやった、偉いわ」

「すみません、ホントに明日、早いんで」

「そうやな、スマンかったな」

二人に握手を求められ、僕は応じてすぐに廊下へ送り出した。ドアを閉めると、廊下から、

『なんや、お前らそこか』

『ああ、洋子ちゃん、帰ってきた？』

『いや、まだ。そこにおったんちゃうの？』

『いいや。どこ行ったんやろな』

声が遠ざかるまでドアに張り付き、振り返ると、椅子に座った洋子は二人が残っていたウイスキーを湯飲みに注いで舐めていた。

「行っただ？」

「うん」

僕は洗面所で手を洗い、ナマズとタコの感触を洗い流した。そしてテーブルにつき、さっきと同じコップにウイスキーを注いだ。洋子と目を見交わすと、本当に十七年ぶりとは思えない気持ちの近さだった。

「ローザだったらね」と洋子は軽く笑みながら言った。「私の養育費、何人からも、とってみたい。私には、革命家で連絡つかへん、なんてウソついて」

「あれ、ウソだったの？」

「向こうは信じてるけど。今日来てた現役三人も、その、地下に潜った人のメッセージを持って来てたのよ。さっき部屋で読んだんだけど、もう、かんつぺきにオカシイの。この革命的状况の中、洋子さんが米帝国から帰ってこられたと聞き安心しました、日米間の帝間戦争も間近く、云々よ。何かね、聞いたんだけど、地下に何十年も潜り続けてるなんて、世界でも例がないらしいのよ。亡命とかはあるけど、自分の国に何十年も潜り続けてるなんて、ね。やつぱりオカシくなるわよね。その手紙、最後になんて書いてあったと思う？」

「さあ」

「これは水溶紙です。読み終わったらトイレに流してくださいって」「すごいね」

「私、思たわ。この人だけは父親ちゃうやろって」

僕は軽く笑った。

「私もね」と洋子も少し笑って続けた。「不思議に思ったことあったんよ。どうしてあんな八百屋だけで暮らして行けるんやろって。アメリカから帰ってきたでしょ。で、家計の内実知ってビックリよ。ものすごい額のカンパよ。大学卒業までの養育費は払い終わってても、向こうにしたら、大企業の実務職とか、大学の先生とかじゃない。若かった頃の新左翼の経歴なんか、やっぱり隠しておきたいわけよ。おまけに子供の事なんかで後ろ暗いことがあったら、ローザが取りに来たカンパ、断られるわけなんかないよね。もうこれはユスリ以外のなにものでもないわ」

「ふう」と僕は少し呆れて言った。

「出生届、出さへんかったんやって、なんかエラそうな理屈つけてたらしいけど、実際の所はわかれへんやろ。男一人からの認知を拒否しようと思ったら、出生届出さへんで、戸籍を作らへんのがいちばん安全やから」

「そこまで！」

「すると思うで」と洋子は余裕の笑みを笑んだ。「そんなに、ローザが死んだ後になって、あんな男らから、洋子ちゃんみんなの子供や、なんて言われても、心底ゾツとするだけやわ。今日一日堪えようて思ってたんやけど。やっぱりあかんかった。自分の部屋に戻ってたなら、あの人たち追いかけてくるし、おらんフリも気が疲れるんで、部屋割り見て孝弘くんの部屋に逃げて来たんよ。ごめんね」

「いいよ。洋子さんと二人で話が出来てよかった」

僕は湯飲みとコップを打ち合わせて乾杯した。

「十七年ぶりやねえ」と洋子はしみじみとした口調で言った。

「ローザとは絶縁してアメリカに行ったの？」と、僕はずっと心に引っかかっていたことを聞いた。

「ううん。孝弘君には悪いけど、全部あなたのせいにして、すぐ仲直りしちゃった。ごめんね、驚いた？」

別に驚きはしなかった。ただ、なんとなく脱力した。

「血は水よりも濃いつてことやね」と僕は他人事のように言い、「

結局、ローザにとって、僕ってなんやったんやろ」と本気の問いを被せた。

「孝弘君、最近まで、たまに話題になってたよ。アンタさえいなかったら孝弘君は私のものになった、とか言って」

僕は苦笑してウイスキーを舐めた。

「孝弘君の子供なら、もう一人作ってもよかった、なんて言ってたのよ。あの子は食べ物に気をつけてるし、まだ遺伝子も痛んでない、なんて」

「ああ、遺伝子ねえ。良く聞かされたよな。遺伝子が傷ついたら奇形児が、とか、ガンになるだとか」

「私言ったのよ、体細胞と生殖細胞は違うのよって。それに、自分の子孫が云々なんて、そんな悪質な血統主義、優性思想じゃないのって。さらに言えば、奇形児云々は、今そこにいる障害者への差別よって」

「なんか、懐かしいね、そういうの」

「懐かしいなんて！ 私はほんの三月前まで、そういうのをやってたのよ。そうそう、ローザったら、私に、孝弘君の子供だけでも作っておいたらよかったのにつて、そんなことも、つい最近まで言うてたわ」

洋子は軽く笑った。

「ところで、孝弘君、ご実家は？」

「公務員住宅に親父の定年までいてね、十年前から、兄貴らの買った西区のマンションにみんなで同居してるよ。親父が寝たきりで、子供三人やろ、狭いマンションやから、俺一人泊まるスペースもあれへん。あれはもう実家やなくて、兄貴の家やね。やから、今回もホテルの泊まりにしたんよ。で、洋子さんのお父さんお母さんは？」

「弟夫妻と同居してる。コンビ二やからね。二人ともたまに店に出て、大変よ」

「なんか、お互い歳とったって感じやなあ」

「感じ、やなくて、歳、実際にとったんよ」

「でも話してると、全然、十七年ぶりって気もせえへんね」

「ホンマや。このまま垂水の辺り、ウロチヨロしてそうやね」

「うん」

「ねえ、明日、本当に垂水のあたり、ウロチヨロしてみない？」

「え？」

「垂水のあたり。孝弘君に、帰るまでに時間あつたら、だけど」

それを聞いて僕は何か清々しい気持ちになり、

「ああ、それはいいね」と返した。

高校の教室の窓いっぱい広がった、晴れた日の明石海峡の眺望を僕は思い浮かべた。（つづく）

第三章 光の海峡

愛媛に帰り、数日して、洋子からメールが届いた。

*

某月某日

孝弘様。

先日はローザの『偲ぶ会』に来ていただいて、ありがとうございます。
ます。

次の日も舞子まで付き合ってもらって、ほんとうに嬉しかった。
実を言うと、貴方を呼ぶかどうか、かなり悩みました。『
偲ぶ会』そのものは完全に場違いな雰囲気になるでしょうし、それ
に、なにより、あんな別れ方をした貴方と、いたいどんな顔をし
てお会いしたらいいか、わかりませんでしたから。

でも、あのちょっとしたアクセントで貴方の部屋に逃げて行っ
て、久しぶりにお話も出来ましたし、今では、お呼びして、再会し
て、よかったと、心から思っています。

さて、これからは、少々長いメールになると思います。

この間もお話した、私のローザへの複雑な気持ちを少しでも整
理するためには、こうやって、私もローザもよくご存知の貴方に手
紙を書くことがいちばんじゃないか、などと、勝手に思っているも
のですから。ごめんなさいね。こちらの勝手な都合でこんなものを
送りつけて。ご迷惑ですか？ なんて聞いてみても、もうこれを開
いちちゃってるからすでに遅いか……。

この間も言いましたように、私のきょうだいたち、姉と弟ですが、
このふたりは父の連れ子で、私との血縁関係はまったくありません。
先日は言わなかったのですが、実は、母は二十歳の頃の交通事故が
もとで、妊娠、出産は無理だと言われていたらしく、相手に連れ子
がいることはむしろ嬉しかったと言っています。一生結婚は出来な

いだらうと思つていたとも言いますし、その意味では、前の結婚相手と死別していて小さな連れ子のいた父は理想の相手だったのかもしれません。「お見合いの、その場で決めたのよ」などと母が昔言つたとき、私は、「その場で」なんて、あまりに極端な話だなあと感じたことを憶えておりますが、ただ、今となつて色々と考え合わせれば、さもありなんとも思えます。もちろん、母が妊娠できない身体だったと聞かされたのはずっと後、日本に帰ってくる直前のことではあるのですが。

そのことに関わつて、ローザに対する母の感情に何かかなり複雑なものがあることには、これはもうかなり前から気づいていました。だって、どう考えてみてもヘンでしょう？ なぜ私は母のもとでずっと育てられたのか。ローザは福井から神戸に帰ってきて、どうして私を引き取らなかつたのか。コミュニケーションはとくに無くなつてたんだし、ローザはずっと結構な額を男達からむしり取つていて、そのお金は、全部とは言わずとも、かなりの部分は母の方に送つていたと聞きました。だったら、その気さえあれば、いつだって私を引き取ることは出来たはずなのに。

『偲ぶ会』では言いませんでした、十年前、ガンの疑いがあつて私に電話してきたとき、ローザは言つたものです。

「お姉ちゃんは、私をどつかで憎んどるから、本当のこと、言つてくれへんかしれん」

「そんなこと、ないでしょう」って私は言いましたけど、

「いいや、本人も気づいとらんけど、憎んどる。だって、あの人が事故で生死の境をさまようて、そのあげく妊娠は無理な身体になつたその年に、私はアンタを、結婚もせんと妊娠したんよ」

私は母のその事故のことを初めて聞かされ、絶句しました。

「私のおながが大きくなつて来てんのを、お父ちゃんお母ちゃんは、それにお兄ちゃんも、なんか薄気味悪い化け物が入つとるみたいな目で見てたのに、お姉ちゃんだけは、違ごうとつた。触らせて、言

うて、私のおなか撫ぜながら泣いてたこともあったんや。あの人は、心底、優しい人やから、自分の中に人を憎むような感情があることを認めようとせえへんだけや。アンタを結局私に返さんかったんかて、そうや。今回も、私のことを氣遣うようで、いいや、本気で氣遣ってくれながら、私に良かれと信じてウソをつきかねんって、私はそう思うんや」

もちろん、こういうことをいくら言われたって、帰れないものは帰れなかったんで、母が付き添って病院に行つて、それでもきちんとか病状を聞けたわけで、結局はローザの懸念は杞憂だったわけですが、でも、私は、この電話以来、すべてのわだかまりの一つ一つが、スッキリと関連づけて眺め渡せるようになったんです。

ローザは、あの世代にしては珍しく三人きょうだいで、上のお兄さんとはかなり歳が離れていましたから、母とは実質上二人姉妹のようなものだったといえます。小さい頃から仲も良かったらしく、ローザが神戸に帰ってきて店を開き、家に週一回の宅配に来るようになってからも、よく二人が台所で話しこんでいるのを見たものでした。ただ、表面上、というか、意識の上では仲良くしていても、もっと心の奥底のドロドロした部分では、また違った感情があったのではないか、と今では思っています。『偲ぶ会』でお話したセンチメンタルジャーニーだって、あの時、家に何の連絡もしなかったのは、単にローザが非常識だったからと言うだけではなくて、ああでもしなければ、私との旅行さえ母は認めなかったからじゃないか、とも思うのです。

結局聞けませんでしたが、あの時、ローザは私を取り戻したかったんじゃないか。

でも、結局思いとどまって、母のもとに返したんじゃないか。

私にはそう思えてならないのです。

御免なさい、長いメールになっちゃいました。

そのうち、またメールしてもよろしいでしょうか？

某月某日

洋子様

メールありがとう。この間は懐かしくて、僕も嬉しかった。

貴女のお母さんの話は初めて知ること、驚きました。

僕のように、フツの家庭にフツに育ったものには思いもよらない世界です。

僕は就職して以来ずっと現場一筋で来まして、ワープロを触りだしたのも最近で、貴女のように文章をスラスラと書くことは出来ない、返事は短いものになるとは思いますが、これからもメールは興味深く読ませていただきます。

いつでも送って下さい。

では。

某月某日

孝弘様

お返事に甘えて、また今回も長いメールを送らせていただきます。まずはご連絡。

来週、私、結婚します。親戚だけを呼んで、簡単な式をします。相手はもう五年も付き合っている同僚です。日本に帰ってきてから十年、仕事も忙しかったし、ローザのことはあるしで、結局、こんな歳になってしまいました。貴方が大学卒業してすぐに結婚されたのとは対照的で、別れてからのお互いの人生行路を思うと、本当に感慨深いものがありますね。

蒸し返すようですが、私はずっと貴方を恨んでいました。

だって、実の母と二股かけられたんですよ。

これは恨みますよ。おまけに私の手紙を見せてたなんて。

いえ、別に、こんなことを書いたからと言って、貴方に謝らせたとか、そういう下心があるわけじゃないんです。二股と言えば、

私も、東京に、カレシに近いような、違うような男がいましたからね。今となつては、こいつにテイよく遊ばれていただけなのかもしれないませんが、いちおう身体の関係もありました。まったく、人のことは言えませんよね。

死ぬまでの十年をローザと共に暮らした今では、若かった貴方もきつとローザに振り回されてたんだろうな、と、状況をなんとなく理解することができます。ひどい話ですが、生前、ローザは、よく貴方とのセックスがいちばん良かったなんて、自慢げに言っていましたもの。

「あんなイイ男と別れるなんて、アンタもバカなことしたな」って。別れる原因を作ったのはあなたでしょうって、言いたくなりましてけどね。

でも、正直なところ、どうだったの？ ローザに、そんなによくしてあげたのかな？ 私は、貴方とはたまにしか会えなかったし、きちんとした関係を作っていくには、東京と松山じゃあまりにも距離がありすぎました。最初から無理だったのが、ローザが間にいることでややこしくなっただけなんでしょうね。そういうことを理解できるようになってからは、もう貴方を恨むのはやめました。

御免なさい、びつくりさせちゃいました？

この話は終わりにしましょう。三人だけの、と言っても、ローザは死んじゃったから、二人だけの秘密ですね。これで封印します。

それより、ローザの最期のこと、この間は話せなかったことを。アウトラインはこの間『偲ぶ会』でもお話した通りで、私はあれは純然たる事故だと思っています。けれど、状況が状況だっただけに、しかも、なんと言っても、今に続く過激派を作った元幹部で、おまけに、これは死んでからわかったんですけど、現役とのつき合いも完全に切れたわけではなかったようで、そんなこんなで、警察は当初、他殺の線でも動いていました。そうそう、現役と言え、十数年前まで、ローザって、年に一回くらいの割合で家宅搜索を受

けてたんです。だって、現役の誰かが捕まったとするでしょう、したらその住所録なんかローザの連絡先が載ってたりして、当然、ローザにも家宅捜索が入るというわけです。私と暮らしている時期にはもうありませんでしたけどね。ローザがずっと離れて暮らしていたのには、私をそういうトラブルに巻き込みたくないってのもあったのかも知れませんか。

さて、ローザの最期で問題だったのは、なぜ、トイレと反対側の崖に行ったのか。

それと、これはあまり男性に言うべきコトじゃないかも知れませんが、なぜ下半身裸で転落したのか。

この二点で、これじゃ、警察でなくても怪しみますよね。

調査はなかなか進みませんでした。だってローザの友人たちは、刑事、と聞くなり態度を硬化させて、状況の正確な把握を難しくしてしまっただけです。あれが本当の事故死だと結論が出るまで二週間くらいかかったんじゃないでしょうか。

ありのままを書けば、あの飲み会の会場は昔のままの農家ですから、トイレ、というか便所は、夜はひどく暗くて、おまけに遠いし、つい畑の畦でキュウリの苗に隠れて……ところが酷く酔っている上に、下ろしたズボンにも足を取られ、転落、したのだというのが警察の結論です。私もそうだろうと思います。

貴方にこんなことを白状するのはなんですが、私もその飲み会の農家で、かつてローザからそういうやり方を習ってましたしね。まったく、男性たちの言う、連れションです。降るような星の下で、山の風に吹かれて、気持ちよかったな。

ローザの最期は、確かに残念の一言ですが、ローザらしい最期だと言われればそうかもしれないし、今ではこれも納得しかけています。

御免なさい、尾籠な話で。

ついでに。

結婚は、今流行りの「できちゃった婚」でもあります。

それでは。

某月某日

洋子様

まずは謝っておきましょう。振り回されていたのはその通りですが、私自身もいい気になっていた部分もありました。手紙も、見せるべきではなかった。御免なさい。

ローザが亡くなったのは本当に残念です。
生きているうちにもう一度会いたかった。

それから、最後になりましたが、ご結婚おめでとございます。
お幸せに。

某月某日

孝弘様

お祝いの言葉、ありがとうございます。

昨日から、ローザと暮らしたマンションに主人がほとんど身一つで入居して来て、何の新味もない新生活がスタートしました。

先日の結婚式では、いい歳した娘の白無垢姿に感極まった母が泣き出してしまい、言うにことかいて、

「ローザにも一目見せてやりたかった」

ですって（もちろん、母は「ローザ」なんて言いません。ローザの戸籍上の名前で言ったんですけど）。

ローザが見たらなんて言うか……。主人はガチガチの近代科学者で、こんな人間をローザが気に入るわけなんかないし、だから付き合っていることも黙ってました。それに、相手が誰であれ、結婚するなんて言ったら、きつと、籍は入れるなどの、別姓やれだの、訳のわからないことを言ってかき乱しただろうことは想像に難くありませんしね。それが神前での白無垢なんて見せてりゃ、大騒ぎですよ。

ローザが亡くなってまだ半年だというのに、結婚をこれほど急い

だのは、実は、父の病状が思わしくなく、生きているうちに、この行き遅れの娘の花嫁姿を見せてあげたかったというのが、いちばん大きな理由です。私自身と言えば、ちゃんとした結婚にあこがれはあったものの、今のこの主人との関係が、その「ちゃんとした結婚」に値するのかどうか逡巡があつて、なかなか結婚にまでは踏み切れなかったのです。

主人は私の上司ですが、極めて有能な、職場では見ているだけで腹の立つ男です。まったく、何度この男に叱りつけられて煮え湯を飲まされたことか。有能なのに、その言動から何をやっても憎まれる、実に損な性格の男で、それが祟つて四十過ぎまで独身だったと言われています。ただ、外見だけはカワイイので、会社では「ポチ」と呼ばれています。

私はポチと出会つて、自分の限界を知りました。私がいくらがんばつても、この男には絶対に勝てない、と。だったら、ポチをずつと陰から応援する立場になつてもいいんじゃないか、と。それにもう、会社勤めは疲れました。いい歳して連日の徹夜はこたえます。

と言うわけで、ローザの店は、私が会社を辞めて継ぐことになりました。ポチにとっては、出来の悪い部下が去り、兼業主婦がやつて来たつてところでしょうか。もちろんポチは有機農法の店なんかには反対してまずけどね。あんなのはただの原始回帰志向の非科学だつて。まあその通りなんでしょうが、非科学で癒される心だつてありますからね。

それでは、今日はこの辺で。

某月某日

洋子様

新婚生活がスタートしたみたいですね。

心より嬉しく思います。

こちらは相変わらず十年一日のごとき日々が続いています。

あれから二十年が過ぎたなんて、ウソみたいです。

ではでは。

某月某日

孝弘様

先週、父が永眠いたしました。

ローザと母との間に挟まれ、自分の置かれた位置に戸惑うこともあった私を、いつも私の立場に立って、しっかりと支えてくれた、優しい、優しい父でした。父がいなければ、私はもっと早くあの家を飛び出していたことだと思います。

父は血のつながりがない分、私を特別に可愛がってくれたのではないかと思う節さえあります。姉も、弟も、留学はおるか、四年生大学にさえも行かなかったのですよ。小さい頃から、私は父から、「洋子は賢い」「洋子は頭がエエ」って言われ続けてたんですけれど、これって、あとの二人は賢くなくて、頭が良くないってことになりませんか？ でも姉も弟も、嫉妬はしなかったって言ってます。私もともと違う人種だと思ってたって。思えば、それはその通りかもしれないですね。今、姉は看護婦、弟はコンビニの店長で、どちらも子供が三人もいます。みんなコロコロとした、濁りのない素直な子供たちです。

何かの本で、子供のいない夫婦は、どちらかが母親を憎んでいるんだ、なんていう文句を読んだことがあります。私があれば、「ちゃんとした結婚」に憧れながらも結局はこの歳になるまで踏み切れず、子供ももつけなかった理由の一つには、もしかしたら母との関係もあるんじゃないかと思うこともあります。母というのは、ローザじゃないですよ、育ての母のことです。ああ、ややこしい。

このことを説明するのに、ちょっとした枠組みを用意しましょう。人間には「コントロール型」と「コミュニケーション型」の二つのタイプがあると思います。他人をコントロールしたいタイプと、他人とコミュニケーションしたいタイプ。まあ、露骨に言え

ば「支配」志向と「交流」志向ってことになるんでしょうけど、こ
うピッチと分けることは出来なくても、どちらの要素が多く含まれ
てるかで、身近な人たちの性格をある程度理解できるような気がす
るんです。

で、ローザが「コントロール型」の皮を被った「コミュニケーション型」だったのと対照的に、母は、「コミュニケーション型」の皮を被った「コントロール型」だったと思うんです。

ローザは昔新左翼の幹部をやってたほどで、表面だけからは「支配」志向だったように見えますけれど、実際には、人を自分の思うように動かそうってタイプじゃありませんでした。確かに、一見、押しつけがましくて、ワガママで、「コントロール型」って感じなんですけど、よく見れば、あれって、相手の反応欲しさなんです。相手に答えて欲しくてああいう態度に出てるんで、実際には「コミュニケーション型」でした。だから早々と政治からは引いて、コミュニケーションやったり、八百屋やったりしてたんだと思います。

それに対して母は、人の話は良く聞くし、控えめだし、表面だけからは「コミュニケーション型」だと思えてしまっただけど、本当は、周囲を自分の「愛」でコントロールしようとしてるんです。実際、母は、「愛」という真綿で私をがんじがらめにして、自分の思うようにコントロールしようとしてましたからね。それに、私自身にも、もともと、あのコミュニケーションから救い出してもらったという負い目があったから、だから、この恩を返すためにも、この母を悲しませてはいけない、この母の望むような子供にならなきゃならないって、ずっと、母の望むような子供になろうって、してきたんです。もちろん、そのことでつらい思いなんか、したことないですよ。でも、私の心からは、ある種の自由さが消えてしまったんです。いつも、私は、私がこうしたら、母はどう思うだろうって、そればかりを気にしてました。

だから、貴方と抱擁しあった最初の日、母と目を合わすのが辛かった。母は気づいたんじゃないかと何度も思い、そうじゃないみた

いだとわかり、でも、逆にそうになると、どうして気づいてくれないの少し憤ってみたい。初めてキスした夜もそう。初めてセックスをした日もそうでした。母にバレないかと恐れながらも、実際には、気づいて欲しかった。母に知って欲しかった。つまり、私は、心の奥底を母にしっかりと掴まれ、常に母の視線を背後に感じながら、母のコントロール下で生きていたんです。

姉や弟はこんな想いはしていないらしく、説明しても理解してもらえません。ということは、こういう「愛」の注がれ方をしたのは私だけかも知れず、これは、やはり「血」なのかな、などとも思うのです。母にとって私は、実際には姪とはいえ、唯一の血の繋がった「子供」ですからね。

こういうことに気づいたのは、私のアメリカ留学が決まったことへの、母とローザの反応の違いからでした。

ローザの反応は知っての通りです。後先考えず、電話してきました。

「何で知ったの？」って言うと、
「手紙で見た」なんて答えるんですよ。「孝弘君に見せてもらうた」なんて。

こんな人が他人をコントロールできるワケがありませんし、そんな気も無かったでしょうね。純粹に『寂しい』ってだけで、激情的に動ける人だったんです。

で、母は同じ日の電話で、

「ローザから聞いた。アメリカは、私は賛成する。だから、思い切っ
って行ってらっしゃい」って。

でも、口調がね、粘っこく引き留めてるんです。

それで私はひどく混乱しました。

母の望むように勉強して良い子になって、そして一流の大学に進学して、さらには日本の大学を超えてもっともって偉い人になるう
としていくというのに、どうして心から喜んでもらえないんだろう
って。

言葉と口調とが著しくかけ離れた母の反応は、私を極度に不安にしました。

例えば犬が『どこへでもお行き』って解き放たれたようできて、それでも手綱は首にしっかりと巻かれているような、どうしていいのかわからない気持ちになったのです。それで、留学については時期を見てローザや母に話そうと思っていたのに、それなのに今二人に知らせてしまった貴方へと、私の怒りは向いたのです。

でも、いくら貴方に怒りをぶつけたって、母の、あの、言葉と口調との矛盾が消えるわけではありません。時間が経つにつれ、母は本当のところはどうして欲しいんだろって、そればかりを考えるようになりました。本人に聞くわけにもいきませんしね。だって答えはわかってますから。「賛成よ」って。本音が聞きたいのよって言うってみても無駄でしょうね。きつと「心から賛成よ」って言うに決まっていますから。

そうやって悩んでいたら、突然ローザが東京にやって来たんです。で、

「アメリカ行ってもエエから、私を捨てんとってくれ」って。

なんか、ホツとしました。口調と本音の一致に。それで、一晚、話し合いました。ローザの考えは私と同じでした。母はやはり引き留めたいと思ってる、でもそれが出来なくて、自分の心の矛盾に苦しんでいる、と、そんなことをローザは言いました。

「私も取り乱して悪かったけど、お姉ちゃんのあの落ち着きはもつと質が悪いと思う。本人は、心からアンタのことを考えて賛成した気になつとるけど、あれは自分を騙しとる。本音では泣きわめいてでも引き留めたいはずや。口では賛成って言いながら、もっと他の手段で『行くな』いうメッセージを発しとる」

「うん。それは感じるよ、すごく」

「やから、やっぱりアンタはアメリカに行くべきやと思う。アンタ自身が、お姉ちゃんから自立するためにもな」

「自立？」って、その時私は聞き返したと思います。

「そうや。アンタはお姉ちゃんに縛られと思う。どっかで吹っ切らんとあかん」

そう言えば、あの夜には貴方の話は出ませんでしたね。お互い避けてたんでしょね。

今回も長いメールになって御免なさい。

某月某日

洋子様

お父様のこと、心よりお悔やみ申し上げます。お会いしたことはありませんが、きつと立派な方だったんでしょ、貴女にこれほど慕われているんですから。

僕が貴女ほど文章が上手ければ、もっと色々と書いて差し上げられるのでしょが、申し訳ありません。

東京に行けとローザに言ったのは僕です。思えば、あれがローザとの最後の会話でした。

某月某日

孝弘様

四十九日もとうに過ぎ、しみじみと父の不在を噛みしめています。夕方になると悲しくなり、つい涙を流すことさえあります。

ローザが死んだときには、私は泣くことさえ出来なかったのに。

今になつて思えば何か不思議ですが、ローザが死ぬなんて、私にはありえないことで、目の前に起こつてる出来事、その事実をうち消すのに躍起になつてたつて感じですね。病院からの電話でも、ただの事故としか聞いていませんでしたし、ローザに会つて、お亡くなりですつて言われたときも、本当に月並みな反応ですけど、『ウソでしょ、寝てるだけでしょ』つて。

それからもう、警察から事情聞かれたり、ローザの友達からは警察には関わるなつて言われたり、『愚ぶ会』発起人の三人が色々と手配してくれなかったら、どうなつていたことだらうつて思いま

す。

前にも書きましたように、警察の調査は長引いて、ローザの公的な葬儀の機会は、結局、逸してしまいました。まだ調査中で遺体も帰ってきていない中、身内だけの葬式を、公園の集会室を借り、本当にささやかに持ちました。でもお三人が、これはあんまりだからと追悼集会をしようと言いつつ出され、あの『偲ぶ会』の開催に至ったのです。招待する方々は、最初の基本的なラインをあのお三人が選定した上でそのリストを私が最終的にチェックしたのですが、当然、その中に貴方は入ってはおりませんでした。

私は貴方のことをずっと忘れずにいましたし、ローザも、死ぬまでもう一度貴方に会いたなんて、戯れに言っていたこともあり、私は貴方の名前をリストへ加えました。もちろん、来てくれるかどうかは貴方の気持ちにかかっているわけで、リストに加えたからと言って貴方が来てくれるかどうかはわからないわけだけれど、でも、私には、来てくれるだろうという確信がありました。

最終締め切りの後、参加者名簿の中に貴方を見つけ、しかも泊まりだと知って、私はひどく嬉しかった。ローザを亡くして何か穴の開いてしまった日常の中に、貴方との再会への期待という、古いような新しいような充実がもたらされたのでした。実は『偲ぶ会』に主人を呼ばなかったのは、姑息ですが、貴方との再会を純粋なものにしたかったからなんです。そしてあの夜、私の気持ちは純粋でした。私の中では二十年の時間は消え去り、二十年前と同じ気持ちで、二十年間のわだかまりを消すことが出来ました。たぶん、私は貴方にお礼を言うべきなのでしょう。ありがとうございました。

明日から産院に入ります。ローザの友達のやっている自然出産の産院です。これまで、ローザのやっтерることを基本的にバ力にしていたが、自分が母になると思うと、急に色々と不安になり、考え始めるものです。人間って勝手ですね。

生と死と、まるで父やローザと入れ替わりです。

メールはしばらくお休みさせていただきますいな。

＊

『偲ぶ会』の夜、洋子は自分の部屋に戻らなかった。

そして、ごく自然に僕は身体を重ね、二十年という時を一人で乗り越えた。僕らは何一つ、変わってはいないように思えた。

「昔の気持ち」と洋子は言った。「今の身体で確かめるなんて、そんなこと、出来るわけないのにね」

「出来なかった？」

「出来たから、不思議なんよ」

「うん」

「みんな平等に歳をとるって、結構いいことかも知れへんね」

考えてみれば、洋子と一夜を共にするのは初めてだった。

僕は昔ラブホテルのサービスタムによくやったように、暗闇の中で、互いの顔を見ずに語り合った。留学中のこと、職場のこと、最近のローザのこと、等々、話の尽きぬ洋子に比べ、子供のこと以外に話題のない自分がなんとなく情けなかった。

話しているうちに僕らはいつの間にか寝てしまい、洋子に起こされたときにはもうカーテンの向こうがほの白かった。もう一度身体を重ね、洋子は自分の部屋に戻っていった。

＊

三宮で待ち合わせてJRに乗り、垂水駅を出て駅前に立つなり、僕らは顔を見合わせ、空を見上げて立ちつくした。駅正面にあったはずの商店街からはアーケードが外され、広げられた道に視界も広くなり、これだけでも充分、地理カンがマヒさせられた。それに加えて巨大なビルがいくつも建ち、空気には道路工事の埃と喧噪が満ちていて、とてもここが垂水駅前とは思えなかった。僕にも洋子にも、まるで見たことのない街だった。

「洋子さんは、垂水は何年ぶり？」

「七年ぶり、かなあ。このあたり、震災の被害はそれほど酷くなかったって聞いてたから、昔の風情もあるかなって思ったんだけど」

「新幹線やと、新明石から新神戸までってほとんどトンネルやから、

僕はこのあたりは景色もしばらく見たこと無かった」

僕は商店街を少し歩き、脇道に入って、あの頃よく行った喫茶店を探した。ところが、僕にも、洋子にさえ、現在地もわからない状態だった。

「高校に行ってみる？」と洋子は申し訳なさそうに言った。

「校舎は確か、建て替えられたんよね」

「そうなんよ。風情のある建物やったのにね」

「なんか、このあたりで昔のままのところってないんかな」

「そうね」と洋子は工事中の道路に立って考え込んだ。

昨日までの雨はきれいに上がり、澄んだ青空が広がっていた。そのかわり、風は北から強く吹きつけ、洋子の長い髪をなぶっていた。

「五色塚は？」

「古墳？」

「そう。なんぼなんでも、古墳は昔のままでしょう」

「そりやそうだ。あそこの上からの景色、すごかったね」

「じゃ、古墳に行こう」

坂道を登り十分ほど歩くと、道の向こうに、敷石で葺かれた古墳のテラスの部分が見えてきた。古墳に近づくほどに視界には明石海峡大橋と淡路島が広がり、浅い春の穏やかな日差しに波打つ海峡からは、呼び交わすような汽笛が風に逆って聞こえてきた。

「ここって、確か、古墳の上に昇れたよね」

古墳の回りは空堀と金網で囲まれ、中には入れないようになっている。

「うん。昔はよく昇ったもん」

僕らは前方後円の「円」の部分に沿った道を降り、入り口のある事務所の前まで来た。ところが入り口には、月曜は見学は休み、との旨の書かれた札が下がっていた。

「神戸って、月曜休みの所、多いんよね」と洋子は思い出したように言った。

「残念」

「私ら、ここまで何しに来たんやろ」

「この古墳は変わらないから、エエよ。充分、懐かしいよ」

「じゃあ、このまま舞子の方まで降りていこうか。大橋の橋脚まで」
「いいね。実はまだ大橋の下には行ったことないんや」

*

山陽電車の線路を越え、坂を降りて今度はJRの線を越え、国道に出て向こうへと渡ればもう海岸だった。コンクリートで整備された公園の頭上には巨大な大橋が傲岸に聳え、ローザならきつと露骨に嫌悪を催しそうな光景だった。

「天気が良くてよかったね」と洋子は言った。

「本当に」と僕は心から言った。柔らかな日差しを受けながら、二十年前と同じように洋子と並んで歩くことの喜びが僕の心を素直な幸福で満たしていた。

洋子は海岸の手すりにもたれながら、

「憶えてるかなあ。昔、つきあい始めた頃、ここからの夕焼けを見ながら、私がいねって言うたんよ。そしたら、孝弘君も、うん、言うて、一緒にずっと夕焼けを見てくれたん」

「憶えてるよ。洋子さん、言うたもん。こうやって、夕焼けを一緒に見ながら、きれいやって言い合える友達が欲しかったて。あの時は僕も切ない気持ちになったんやで。洋子さんのことを本気で好きやって思ってた」

「やのに今、孝弘君は愛媛に奥さんや子供たちと一緒にいて、私は一人でここにいて。不思議やわ」

僕は何も言えなかった。

「別に責めてるんとちゃうよ。人間の運命なんてそんなもんやろって思うだけよ」

「そっいゃ」と僕は思いついて言った。「移情閣、この辺じゃなかったっけ」

「あそこ」と洋子が指さした橋脚の足下に、まるで三角帽子をかぶった細長いガスタンクのような色と形の建物があった。

「あれ？ あんな所だった？」

「移築されたんよ。今は孫文の博物館になってる」

僕らはその前まで歩いて行った。

「ここも休館や」と洋子は言って笑った

僕も笑いながら、さっき洋子の言った不思議、僕は妻や子供たちと一緒に愛媛にいて、洋子は一人でここにいるという不思議を思った。

「まあ、天気がよかったのが何よりやろね。月曜とか、細かなことはどうでもエエ」

「きつと」と洋子は言った。「今日、ローザが晴れにしてくれたんだよ。私と孝弘君のために。で、あんまり私らが仲がエエんで、嫉妬して、今日を月曜日にして、どこも入れんようにしてしもたんよ」

僕らはそのまま舞子駅まで歩き、ホームで別れた。

洋子の住所も電話番号も、勤め先さえ聞いていなかったことに車内で気づいた。

車窓から眺める瀬戸内の景色が切なかった。

そして愛媛の家に帰ると、また、ただの日常だった。

*

某月某日

孝弘様

昨日、男児と一緒に退院してきました。

結局、自然出産は無理でした。年齢的なものもありますが、大きく育ちすぎたんです。予定日を十二日も過ぎており、性格の悪さもポチの子らしいと、みんな言ってくれてます。

でも、ここだけの話、ポチも私も一重目蓋なのに、この子、笑うと、二重の目元が誰かさんそっくりなんですよ。もちろん、ポチの血液型は貴方と同じO型です。

けっきょく私はローザの娘だし、しょせんはコミュニケーションの申し子だったってことでしょうか。私にとっては、私がどちら側の人間か

を占う大きな賭だったんですが。

で、私の本当の父親の真似をします。このメアドはこれで廃止にします。私のメールは、どうかこのままトイレにでもお流し下さい。それでは、ローザが、また私たちを引き合わせてくれる日まで、さようなら。

あの日の明石海峡の美しさは一生忘れません。

貴方に会えて幸せでした。

貴方もどうか、お幸せに。

某月某日

洋子様

……

*

書きかけのメールを廃棄し、頬杖をつきながら僕はあの日の海峡を思った。

いったい僕は誰と、あの光の中を歩いていたのだろう。

洋子のことを想いながら、僕は思わず『ローザ』と呟いていた。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2173d/>

ローザ

2010年10月8日15時13分発行